

平安京右京二条三坊十五・十六町跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京二条三坊十五・十六町跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、道路拡幅工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年3月

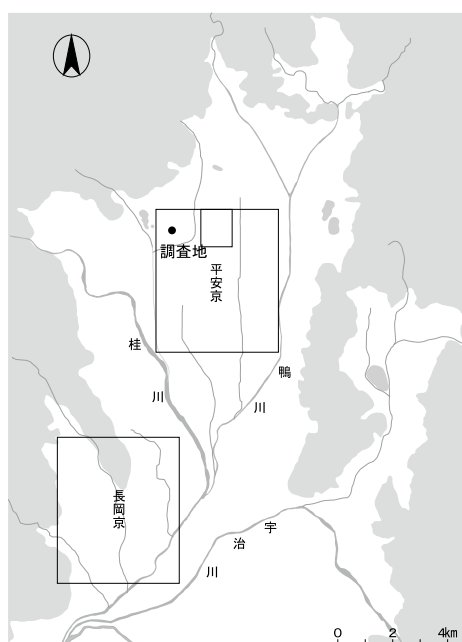
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京二条三坊十五・十六町跡（文化財保護課番号 94 H 604） |
| 2 調査所在地 | 京都市右京区花園藪ノ下町、花園春日町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 2012年9月10日～2012年11月29日 |
| 5 調査面積 | 579.6㎡ |
| 6 調査担当者 | 東 洋一・南出俊彦・尾藤徳行 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 100の位に調査区の番号を振って各調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 東 洋一
付論 自然化学分析：パリノ・サーヴェイ株式会社 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |
| 15 協力者 | 輸入陶磁器に関しては、平尾政幸氏にご教示をいただいた。 |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 遺跡の環境	2
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	8
(1) 遺構の概要	8
(2) 1 区	10
(3) 2 区	10
(4) 3 区	14
(5) 4 区	14
(6) 5 区	18
(7) 6 区	19
(8) 7 区	24
4. 遺 物	26
(1) 遺物の概要	26
(2) 土器類	26
(3) 輸入陶磁器	32
(4) 瓦類	34
(5) 銭貨	35
(6) 石製品	35
5. ま と め	36
6. 付論 自然化学分析	38
(1) 調査地点・分析層準	38
(2) 分析方法	40
(3) 結果	40
(4) 考察	42

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区北トレンチ全景（北から）
		2	1 区南トレンチ全景（北から）
図版 2	遺構	1	1 区南壁断面（北から）
		2	1 区溝 111 内土師器群（北から）
図版 3	遺構	1	2 区北半全景（北から）
		2	2 区南半全景（北から）
図版 4	遺構	1	3 区全景（北から）
		2	3 区断割断面（南西から）
図版 5	遺構	1	4 区全景（北から）
		2	4 区北壁断面（南から）
図版 6	遺構	1	4 区落込み 406（東から）
		2	4 区溝 408 内土器群（北西から）
		3	4 区溝 411 内土師器群（北東から）
図版 7	遺構	1	5 区全景（北から）
		2	5 区北壁断面（南東から）
図版 8	遺構	1	6 区北トレンチ全景（北から）
		2	6 区北トレンチ北壁断面（南東から）
図版 9	遺構	1	6 区南トレンチ北半全景（北から）
		2	6 区南トレンチ北半南壁断面（北から）
図版 10	遺構	1	6 区南トレンチ南半全景（北から）
		2	6 区南トレンチ南半南壁断面（北から）
図版 11	遺構	1	6 区溝 602・603（北東から）
		2	6 区井戸 604（北東から）
図版 12	遺構	1	6 区門 1・橋脚 1（北東から）
		2	6 区埋納遺構 607（北東から）
		3	6 区埋納遺構 608（西から）
図版 13	遺構	1	7 区全景（北から）
		2	7 区西壁断割断面（東から）
図版 14	遺物	土器類	
図版 15	遺物	土器類・錢貨・石製品	
図版 16	遺物	輸入陶磁器	

挿 図 目 次

図 1	調査地および周辺の調査位置図（1：2,500）	2
図 2	1～5区調査前全景（北から）	4
図 3	6～7区調査前全景（北から）	4
図 4	1区南トレンチ調査風景（北から）	4
図 5	6区北トレンチ調査風景（南から）	4
図 6	調査区配置図 1（1：300）	5
図 7	調査区配置図 2（1：300）	6
図 8	調査区配置図 3（1：300）	7
図 9	調査区遺構検出面柱状模式図（主に西壁）	8
図 10	1区北トレンチ実測図（1：100）	11
図 11	1区南トレンチ実測図（1：100）	12
図 12	2区実測図（1：100）	13
図 13	3区実測図（1：100）	14
図 14	4区実測図（1：100）	15
図 15	4区中央セクション断面図（1：50）	16
図 16	4区溝 404・405、落込み 406 平面図（1：20）	17
図 17	5区実測図（1：100）	18
図 18	6区北トレンチ実測図（1：100）	19
図 19	6区南トレンチ実測図（1：100）	20
図 20	6区門 1、橋脚 1 実測図（1：50）	21
図 21	6区埋納遺構 607・608 実測図（1：10）	22
図 22	6区井戸 604 実測図（1：40）	22
図 23	6区柱列 1・2 実測図（1：50）	23
図 24	7区実測図（1：100）	25
図 25	溝 111・411・408 出土土器実測図（1：4）	27
図 26	井戸 604・その他の遺構出土土器・木製品実測図（1：4）	31
図 27	輸入陶磁器実測図（1：4）	33
図 28	軒瓦拓影・実測図（1：4）	35
図 29	銭貨拓影（1：1）	35
図 30	石製品実測図（1：2）	35
図 31	石鏃実測図（1：1）	36
図 32	調査地点の層序	39

図33	各遺構埋土の花粉化石群集	42
図34	花粉化石	44

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	3
表2	遺構概要表	9
表3	検出遺構一覧表	9
表4	遺物概要表	26
表5	輸入陶磁器器種比率表	33
表6	輸入陶磁器品質比率表	33
表7	輸入陶磁器一覧表	34
表8	花粉分析結果一覧表	41

平安京右京二条三坊十五・十六町跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市建設局道路建設部道路建設課（以下「道路建設課」という。）による花園大学北西端から太子道までの西小路通西側の拡幅工事（3・4・161西小路通拡幅工事）に伴う発掘調査である。これは平成23年度の西小路・その1調査（以下「前年度調査」という。）を引き続くもので、前年度調査の南側に位置する。現在の西小路通は平安京条坊街路である恵止利小路の東半部分を踏襲し、調査地は平安京右京二条三坊十五・十六町の東側に位置する恵止利小路西半部に該当する。また、この調査地には東西方向の条坊路である春日小路と大炊御門大路の交差点部分と、一部十五町宅地東端部を含む。前年度調査に続き、平安京条坊復元の重要な情報となる遺構の検出が期待された。

平安京右京域は都市として存続し続けた左京域に対し、平安時代中期から衰退が始まり、平安時代後期には都市機能を失い耕地化していたことが、今日までの周辺調査で判明している。恵止利小路・春日小路は『延喜式』「京程」によれば幅4丈（約12m）とされる。しかし、現在の西小路通の道幅は約5mに満たない。また、春日小路は西小路通より西側は幅約2mの狭隘な国有道路となっており残存しているが、東側は花園大学構内敷地となり消滅している。東西大路の大炊御門大路も幅10丈（約30m）規模とされるが、大路を踏襲する旧二条通（通称太子道通）は幅約5mである。この現象は近接した街区の耕地化に伴い条坊路が巷所化し浸食された結果と考えられる。

調査対象地の総延長は南北約200mに及ぶが、東西道路や隣接住宅の生活通路を確保する必要から、北から順に1区・2区・3区・4区・5区・6区・7区の7箇所に分割して調査区を設けた。掘削排土置き場の都合から、1区・2区・6区は反転調査を行った。調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導のもとに実施し、随時、文化財保護課の臨検を受けた。

調査は9月10日から開始し、遺構成立面までの土層を重機で掘削し、1・2・4～6区で平安時代から中世までの恵止利小路西側溝を検出した。また、3区で春日小路路面、4区で春日小路南端部、7区で大炊御門大路路面を検出し、6区の十五町東端部で平安時代前半の土坑・柱穴・井戸などの遺構を検出した。各調査区の平面および壁面図、各遺構の断面図の各記録をとり、写真撮影を実施した。調査後、埋め戻して、現状復旧などを行い、事務所の撤去ののち、11月29日に全ての調査を終了した。なお、調査中には、当研究所検証委員の鈴木久男氏（京都産業大学教授）、高正龍氏（立命館大学教授）の検証を受けた。

註

- 1) 『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-4、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年。

2. 位置と環境

(1) 遺跡の環境 (図1)

調査対象地は南に低い傾斜地に位置する。北東から南西に流れる天神川や宇多川などの河川による扇状地南端と考えられる。調査地周辺は戦後に宇多川が整備されるまで洪水の影響が顕著であった地域に含まれ、江戸時代から戦前までの地図などで耕作地であったことが明らかになっている。今回の調査区のうち、1・2区は昭和年代に工場となり、3・4区は朝鮮戦争時代に敷設された島津製作所から花園駅への貨物引き込み線が西小路通を横断していた箇所¹⁾に該当する。

前年度調査と今調査には中御門大路・春日小路・大炊御門大路の交差点推定地が含まれる。これらの街路の位置に関しては1895年に作成された『平安通志』復元条坊図¹⁾に当時の地形と条坊と

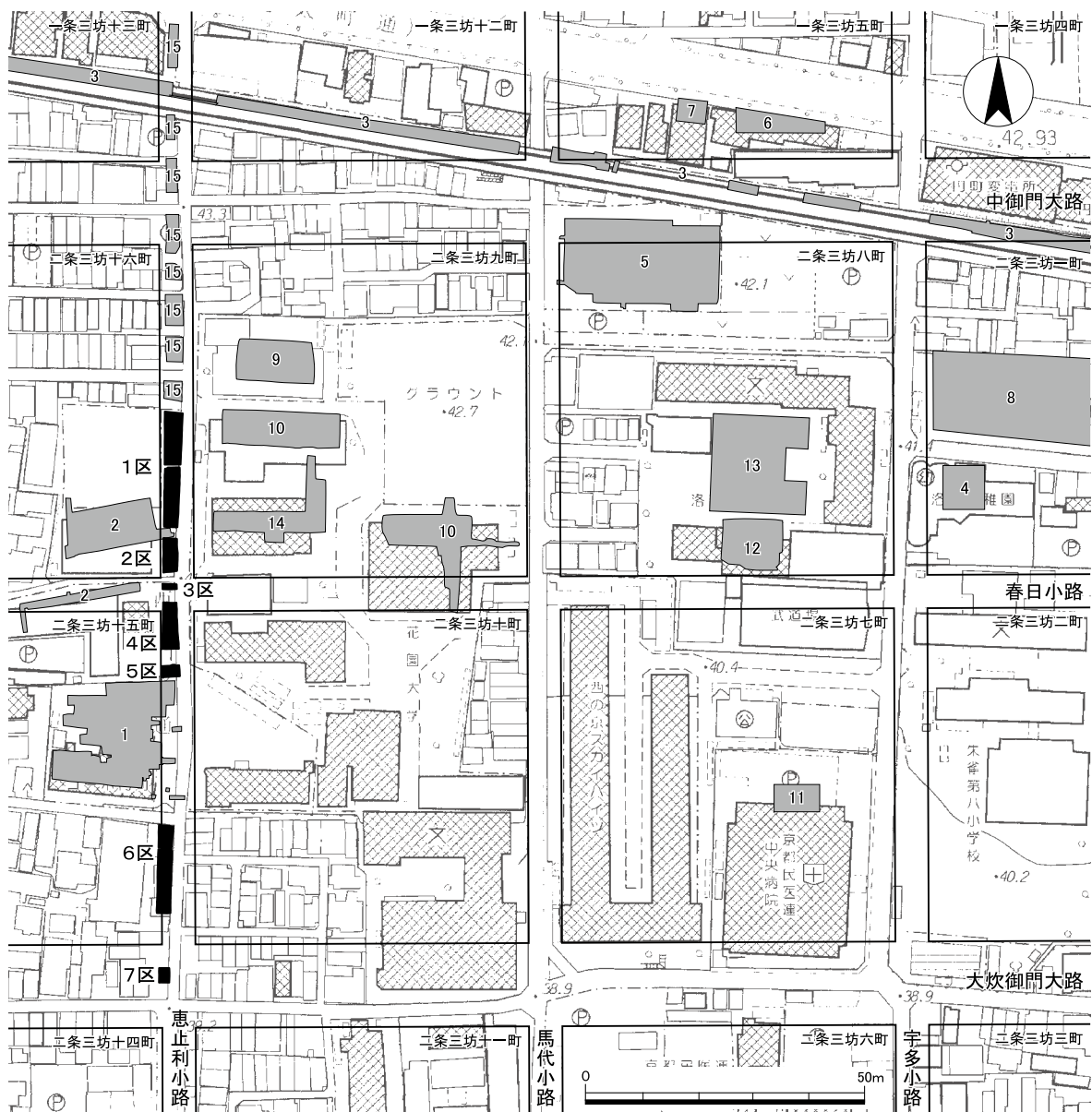


図1 調査地および周辺の調査位置図 (1:2,500)

の関係が表記されているが、遺存畦畔とずれており問題となっていた。1994年に発刊された古代学・古代学研究所編『平安京提要』所収の「平安京内街路古今対照表」²⁾では、恵止利小路に関しては現在の西小路通と正しく訂正されているが、中御門大路・春日小路・大炊御門大路については「該当する街路はない」とされている。しかし、これらの街路はJR嵯峨野線などによって一部寸断されているが、狭い道路が現存しており、前年度調査報告書で、『平安通志』条坊復元図が恵止利小路は約半町西に、中御門大路は約1町南にずれていることを指摘しておいた。

(2) 周辺の調査（図1、表1）

恵止利小路西側に位置する十五町内宅地を1986年度に当研究所が発掘調査（1）を行っている。また、1996年には花園大学考古学研究室によって十六町内宅地の発掘調査（2）³⁾が行われた。いずれも9世紀から10世紀半ばまでの建物群などを3時期にわたって検出している。これらの建物群は11世紀以降消滅しており、宅地が耕作地化したことが明らかになっている。

調査区北側に位置する前年度調査（15）では、10世紀代に埋まった恵止利小路西側溝を推定通りの位置で検出した。11世紀頃から恵止利小路西側の巷所化が始まり、中世初頭にはほぼ現代の西小路西側溝付近まで到達していたことが明らかになった。また、1997年度に実施したJR嵯峨野線高架に伴う当研究所の発掘調査（3）によって、右京の南北方向条坊路のいくつかが平安時代中期後半に水路もしくは流路化していたことが明らかになっている。

表1 周辺の調査一覧表

No.	遺 跡 名	調査機関	文 献
1	右京二条三坊十五町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
2	右京二条三坊十六町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告Ⅴ』花園大学 1998年
3	右京一条三坊、二条二・三坊	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
4	右京二条三坊一町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
5	右京二条三坊八町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告Ⅶ』花園大学考古学研究室 2010年
6	右京一条三坊五町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
7	右京一条三坊五町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
8	右京二条三坊一町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
9	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告Ⅰ』花園大学 1984年
10	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告Ⅳ』花園大学 1993年
11	右京二条三坊七町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
12	右京二条三坊八町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
13	右京二条三坊八町	古代文化調査会	『平安京右京二条三坊八町跡 現地説明会資料』
14	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告Ⅵ』花園大学 1998年
15	右京一条三坊十三町・二条三坊十六町	財団法人京都市埋蔵文化財研究所	『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年



図2 1～5区調査前全景（北から）



図3 6～7区調査前全景（北から）



図4 1区南トレンチ調査風景（北から）



図5 6区北トレンチ調査風景（南から）

註

- 1) 京都市参事会編『平安通志』1895年。
- 2) 古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、1994年。
- 3) 今回の調査対象地である1・2区間に挟まれた花園大学西構内への通路部分は既に花園大学によって調査が行われている。この調査では恵止利小路西側から2条の西側溝と、その東側で「拳大」の礫が敷かれた恵止利小路路面（SF401）を検出したとする。しかし、報告書に掲載された路面断面図（第13図）を見る限り、路面下の「包含層」の「暗褐色粗砂土」を地山まで掘り下げていない。花園大学調査の南北延長に位置する今回の調査（1・2区間）では、後述するように路面の延長線上で中世の砂礫などからなる洪水層で埋まった溝を検出しており、遺物包含層である洪水層上面を路面と誤認した可能性がある。ちなみに、花園大学調査地南に位置する5・6区間の恵止利小路西半部でも、1986年度に京都市埋蔵文化財研究所が拡張区として部分的に調査を行っているが、そこでも路面は検出されず溝内であった。

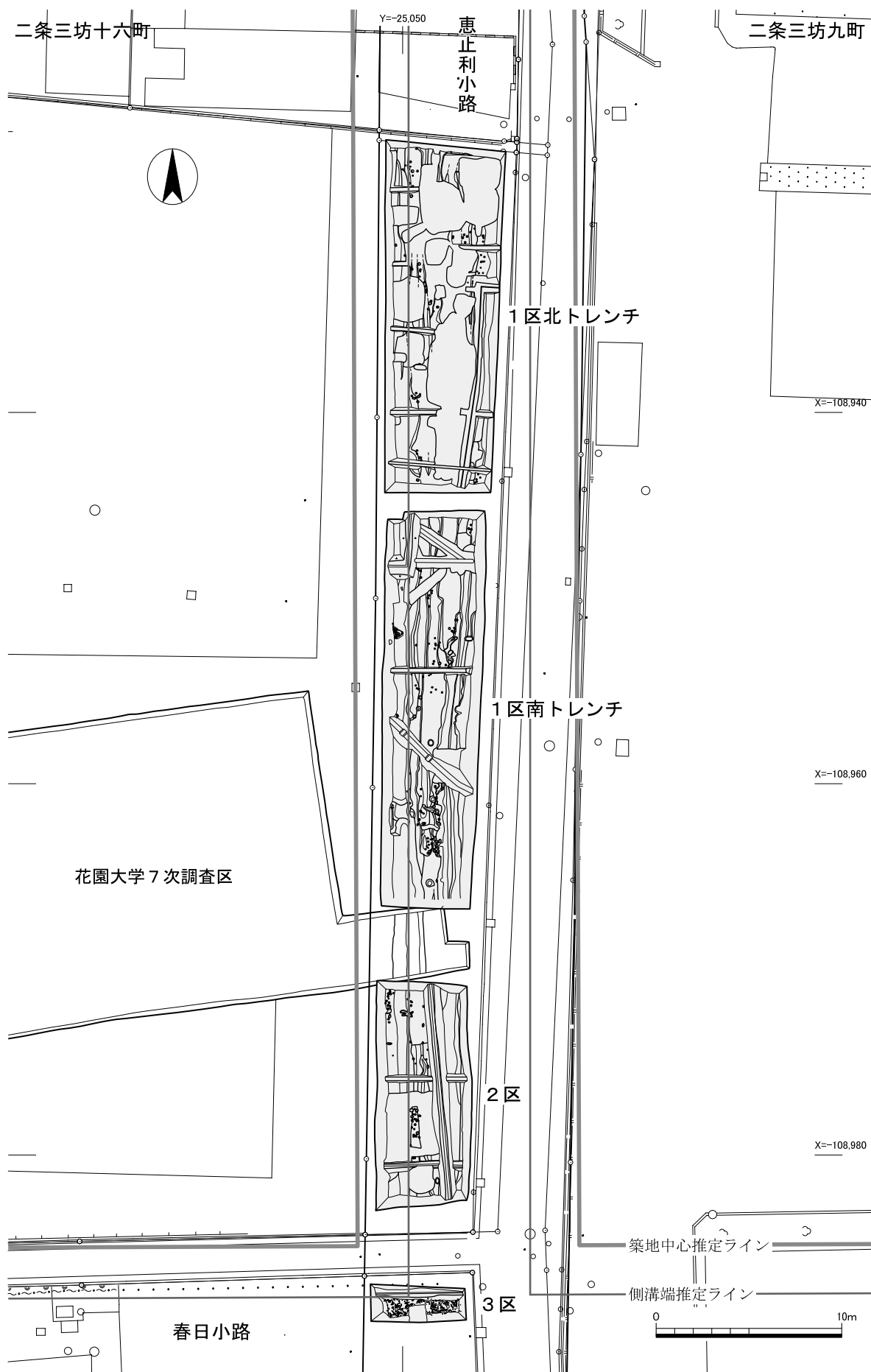


図6 調査区配置図1 (1:300)

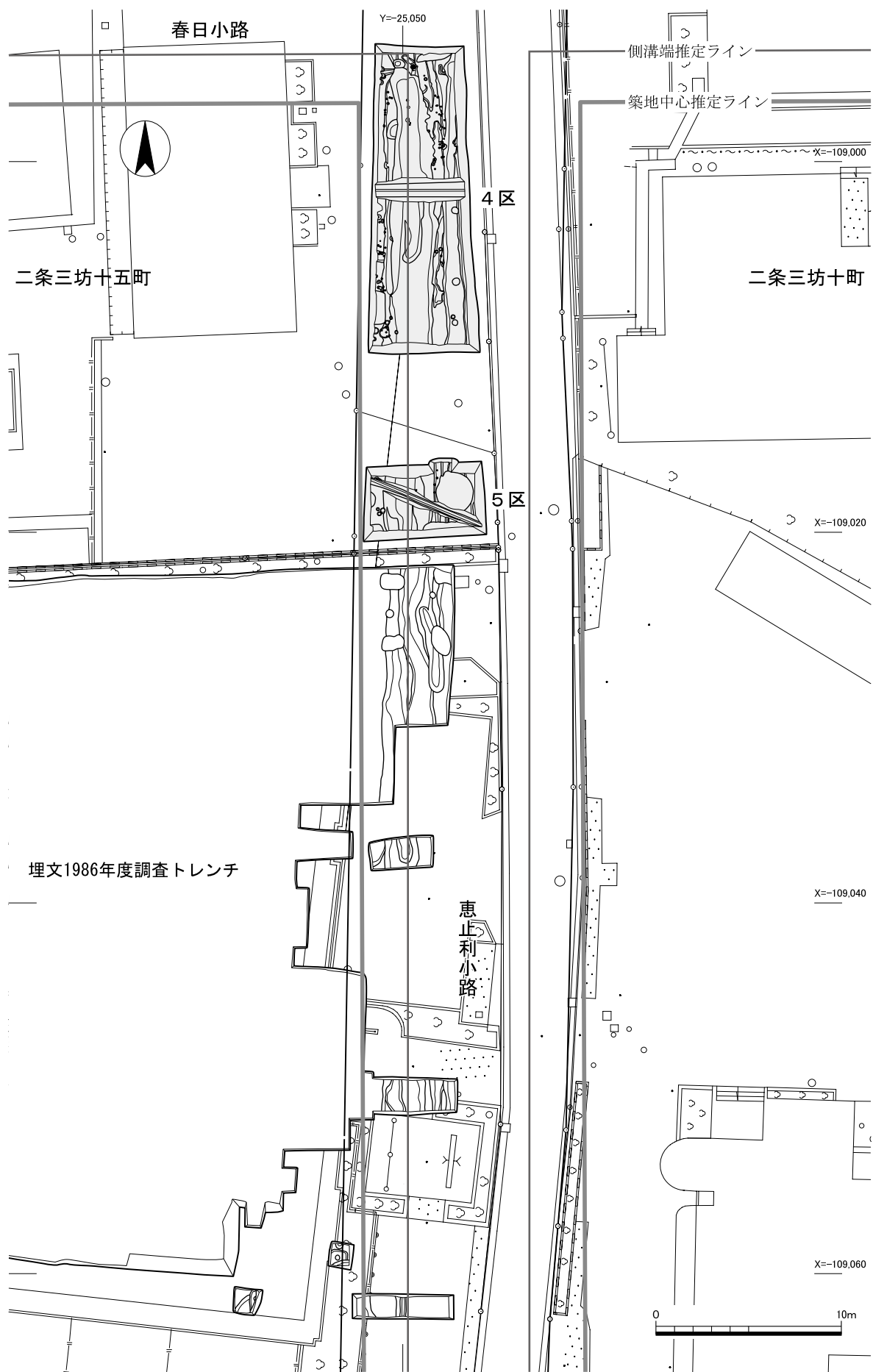


図7 調査区配置図2 (1 : 300)

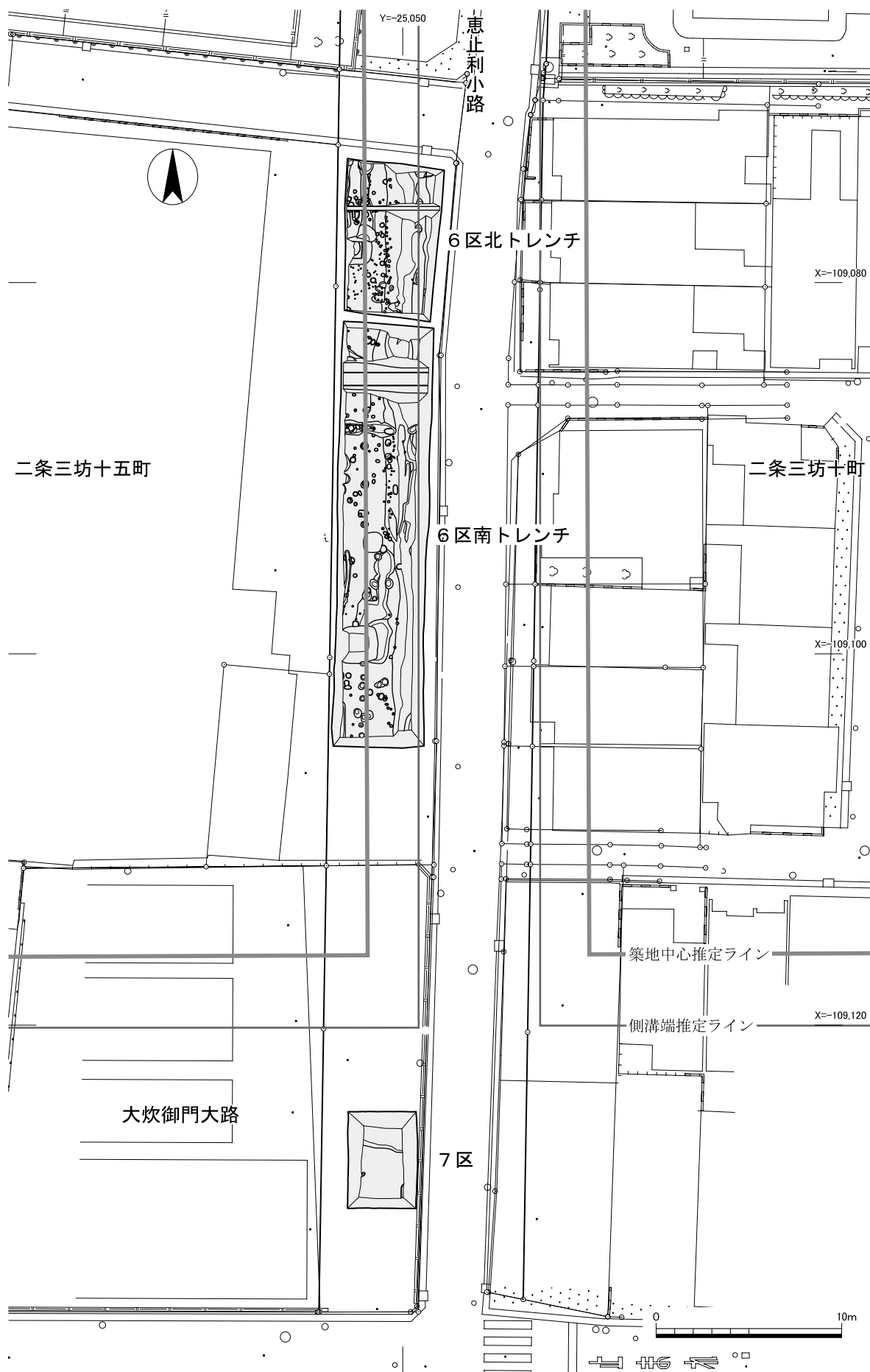


図8 調査区配置図3 (1:300)

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

図9にあるように調査区北端の1区から南端の7区までの遺構検出面の南北高低差は約3.3mである。調査区の基本層序は、遺構検出面上に近世以降の耕作土層が水平堆積しており、耕作土底には暗褐色系の堅い床土が形成されていた。しかし、3区春日小路交差点部と7区大炊御門大路交差点部に限り路面直上に粗砂もしくは砂礫層が堆積しており、床土はみられなかった。遺構は一部を除き地山層を直接掘り込んで成立していた。溝群は西から順に東肩を新たな東の溝に切られた状態で重複して検出した。溝の規模は表3にあるように幅1.9m、深さ0.9mが最大である。地山はほとんどが黄褐色系の粘土層で、一部に強く締まった細かい砂礫がみられた。また、溝に溜まった砂礫層は粒が大きく、上流から流れ込んだ様相を呈している。

今回の調査で検出した春日小路以北の溝群は、前年度調査南端部5区の南延長で、南下するほど溝幅が広く、深くなる傾向がある。春日小路以北に関しては、この影響で複数の溝が新たな溝によって掘り込まれて消滅していた。また、調査区西端で検出した溝の堆積層が10世紀代に埋まった暗黒色系の沼状堆積であるのに対し、中央部の11世紀から12世紀にかけて埋まった溝群は地山

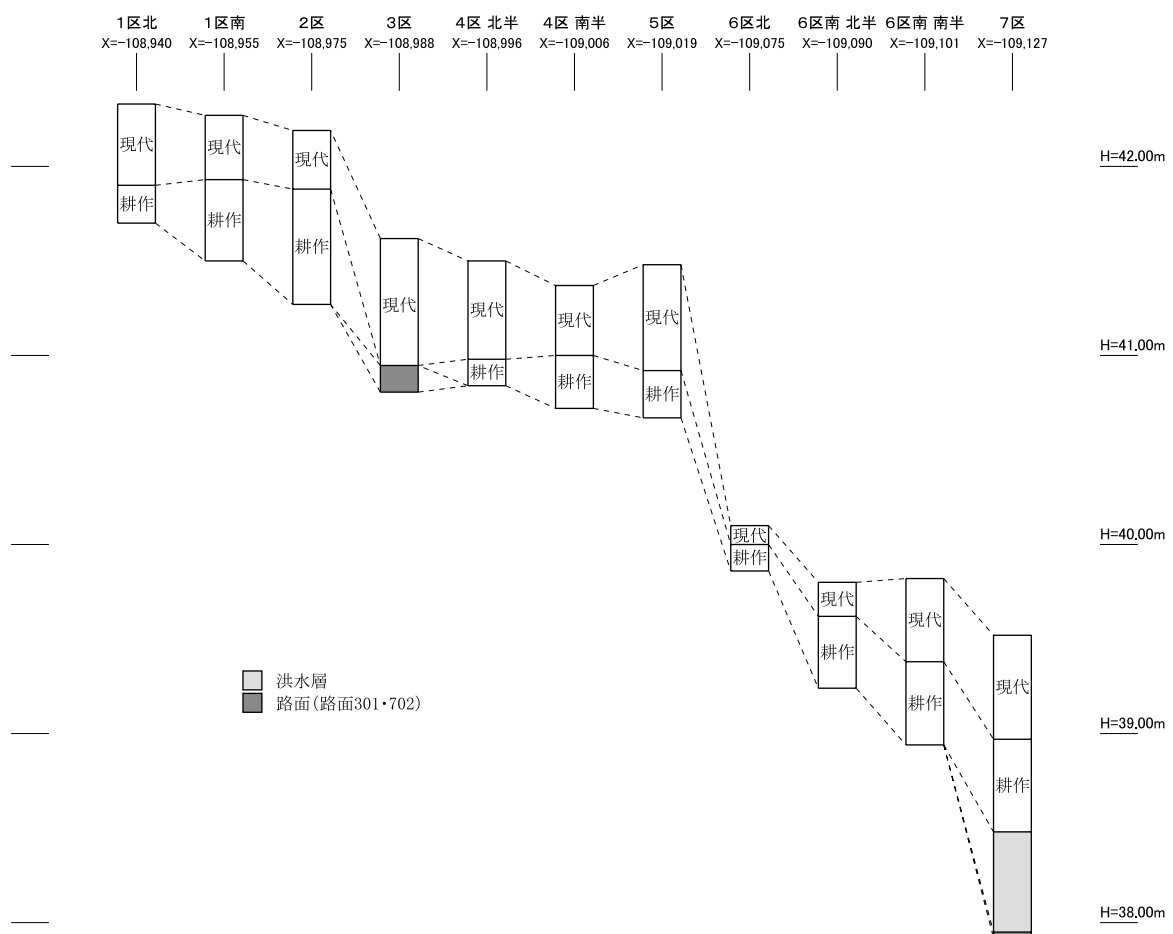


図9 調査区遺構検出面柱状模式図（主に西壁）

の黄褐色系粘土のブロックで埋め戻したものが多い。東部で検出した中世の溝群は深く、幅も広い。主に灰色砂礫層が堆積しており、洪水などによって埋まった可能性が高い。

春日小路交差点に該当する3区で路面を検出した。しかし、溝は検出していない。また、4区北端部では10世紀前半代に埋まった恵止利路西側溝北端が春日小路南端部でやや西方向に向いて立ち上がっていた。春日小路以南は春日小路以北より溝幅が広く、深く掘られていた。

その他、6区では十五町宅地東端部と恵止利小路の築地推定線で平安時代の柱列・門・井戸・埋納遺構などを検出した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構						
	1 区	2 区	3 区	4 区	5 区	6 区	7 区
平安時代前半 (9～10世紀)	溝109～111	溝203～206	路面301	落込み406、 溝408・409 ・411～413 ・419・420	溝504	溝603・613、井戸604、 土坑614・629、埋納 遺構607・608、門1、 橋脚1、柱列1・2	路面702
平安時代後半 (11～12世紀)	溝103～108				溝503		
中 世	溝101・102	溝201・202		溝401～405	溝501・502	溝601・602	

※ 今回の報告では、9～10世紀を平安時代前半、11～12世紀を平安時代後半と区分した。

表3 検出遺構一覧表

遺構	規模(m)	深さ(m)	遺構	規模(m)	深さ(m)	遺構	規模(m)	深さ(m)
溝101	幅0.6	0.4～0.6	溝408	幅0.6	0.3	柱穴609	径0.25	0.15
溝102	幅1.2	0.4	溝409	幅0.6	0.1	柱穴610	径0.25	0.2
溝103	幅0.8	0.3	土坑410	0.5×0.6	0.2	溝611	幅0.1～0.2	0.1
溝104	幅0.6	0.2	溝411	幅2.8	0.6	土坑612	0.7×0.5	0.2
溝105	幅0.8	0.2	溝412	幅0.8	0.3	溝613	幅0.6～0.8	0.3～0.5
溝106	幅0.9	0.2	溝413	幅0.6	0.2	土坑614	1.9×2.0	0.6～0.8
溝107	幅1.0	0.2	柱穴414	径0.3	0.3	柱穴615	0.45×0.4	0.1
溝108	幅0.7	0.2	柱穴415	径0.3	0.5	柱穴616	0.4×0.35	0.2
溝109	幅0.8	0.3	柱穴416	径0.3	0.3	柱穴617	径0.4	0.2
溝110	幅0.7～0.9	0.3	柱穴417	径0.3	0.1	柱穴618	0.4×0.45	0.1
溝111	幅1.5	0.6	柱穴418	径0.3	0.3	柱穴619	0.4×0.35	0.1
溝201	幅0.6	0.3～0.5	溝419	幅1.3	0.4	柱穴620	径0.5	0.2
溝202	幅1.1	0.4	溝420	幅0.7	0.5	柱穴621	0.3×0.2	0.1
溝203	幅0.6～0.8	0.2	溝501	幅0.6	0.3	柱穴622	径0.3	0.1
溝204	幅1.3	0.2	溝502	幅1.8	0.3	柱穴623	0.35×0.4	0.2
溝205	幅0.3	0.3	溝503	幅0.8	0.1	柱穴624	径0.3	0.2
溝206	幅1.5	0.4	溝504	幅1.6	0.3	柱穴625	0.35×0.45	0.1
路面301	5.6×1.0	0.3	溝601	幅0.5～0.6	0.5～0.9	柱穴626	径0.25	0.1
溝401	幅0.7	0.4	溝602	幅1.6～1.9	0.5	柱穴627	径0.3	0.2
溝402	幅1.6	0.4	溝603	幅1.5～1.6	0.9	溝628	幅0.25	0.1
溝403	幅0.9	0.2	井戸604	1.2×1.5	1.85	土坑629	1.3×2.2	0.1
溝404	幅1.0	0.3	柱穴605	0.8×0.7	0.6	溝630	幅0.3	0.4
溝405	幅0.4	0.2	柱穴606	1.1×0.9	0.65	落込み701	幅1.1～1.3	0.1～0.2
落込み406	2.5×1.0	0.2	埋納遺構607	径0.3	0.45	路面702	3.0×2.5	0.05
柱穴407	径0.3	0.2	埋納遺構608	径0.25	0.1			

なお、遺構番号は混乱を避けるため100の位に各調査区の番号を付した。例えば1区で検出した遺構は溝101、3区で検出した遺構は路面301となる。

(2) 1区(図10・11、図版1・2)

1区は工場敷地であったためコンクリート基礎などによる攪乱が著しいが、連続する合計11条の南北溝群を検出した。これらの溝は前年度調査で「溝501～510」にほぼ対応するが、前年度調査の5区西部で検出した11世紀代の「溝509」は消滅している。

溝101～102 溝101は1区南トレンチの東端から東壁に沿って派生する検出幅0.6m、深さ0.6mの黒褐色砂礫で埋まった溝である。この溝は前年度調査の5区東端で検出した溝501に対応する。西隣の幅1.2m、深さ0.4mの溝102も、暗灰黄砂礫層を含み洪水の影響が見られる。中世の輸入白磁や常滑甕などの遺物が少量混じるので、中世以降の溝群と考える。

溝111(図版2) 調査区最西端で検出した幅約1.5m、深さ約0.6mの溝111は、恵止利小路西側溝推定地に位置する。西端が調査区外となるため幅は不明である。南下するほど幅が広くなる傾向がある。最下層には均一な極暗褐色砂泥が約0.3m堆積し、10世紀前半の土器群が出土した。この堆積土に流水痕跡は認められない。しかし、その上に前年度調査4・5区で確認している10世紀前半代の遺物を多く包含する暗褐色砂礫層が、1区南半部まで厚さ約0.1～0.3mで覆っていた。洪水の影響が考えられるが、その上に10世紀代の遺物を包含する均一な黒褐色泥土が1区南端まで約0.4m堆積していた。このことから洪水後も10世紀代に溝が機能していたことが考えられる。

溝103～110 溝101・102と溝111の間に幅0.8m、深さ0.3m内外の溝103～110が掘られている。いずれも浅く、ほとんどが中央部の攪乱によって消滅している。かろうじて残った残存部には褐色系の砂泥が堆積していた。前年度調査で、これらの中央部溝群は出土遺物と重複関係から11世紀以降から中世初頭までの溝とした。今回の調査でも溝106から厚手の「ての字状」口縁を有する11世紀の土師器皿片が出土している。これらの中央部の溝は、南下するに従って溝102と溝111の間隔が2m以上狭まる。溝103～107・110などは、1区南トレンチでは浸食のため検出できなかった。

(3) 2区(図12、図版3)

2区の検出遺構は1区の溝群の南延長で春日小路北に位置する。

溝201～204・206 調査区の1/3は工場の攪乱などで遺構は消滅していた。調査区東端から溝101・102の南延長である溝201・202を検出した。調査区西端で溝111の南延長である残存幅約1.5m、深さ0.4mの溝206を検出した。その間に溝108・109の南延長である溝203・204を部分的に検出した。

溝205 調査区西壁に掛かる幅0.3m、深さ0.3mの東西溝で溝206より新しい。ただ、溝206以东の他の溝群との重複関係は中央部の攪乱のため不明である。

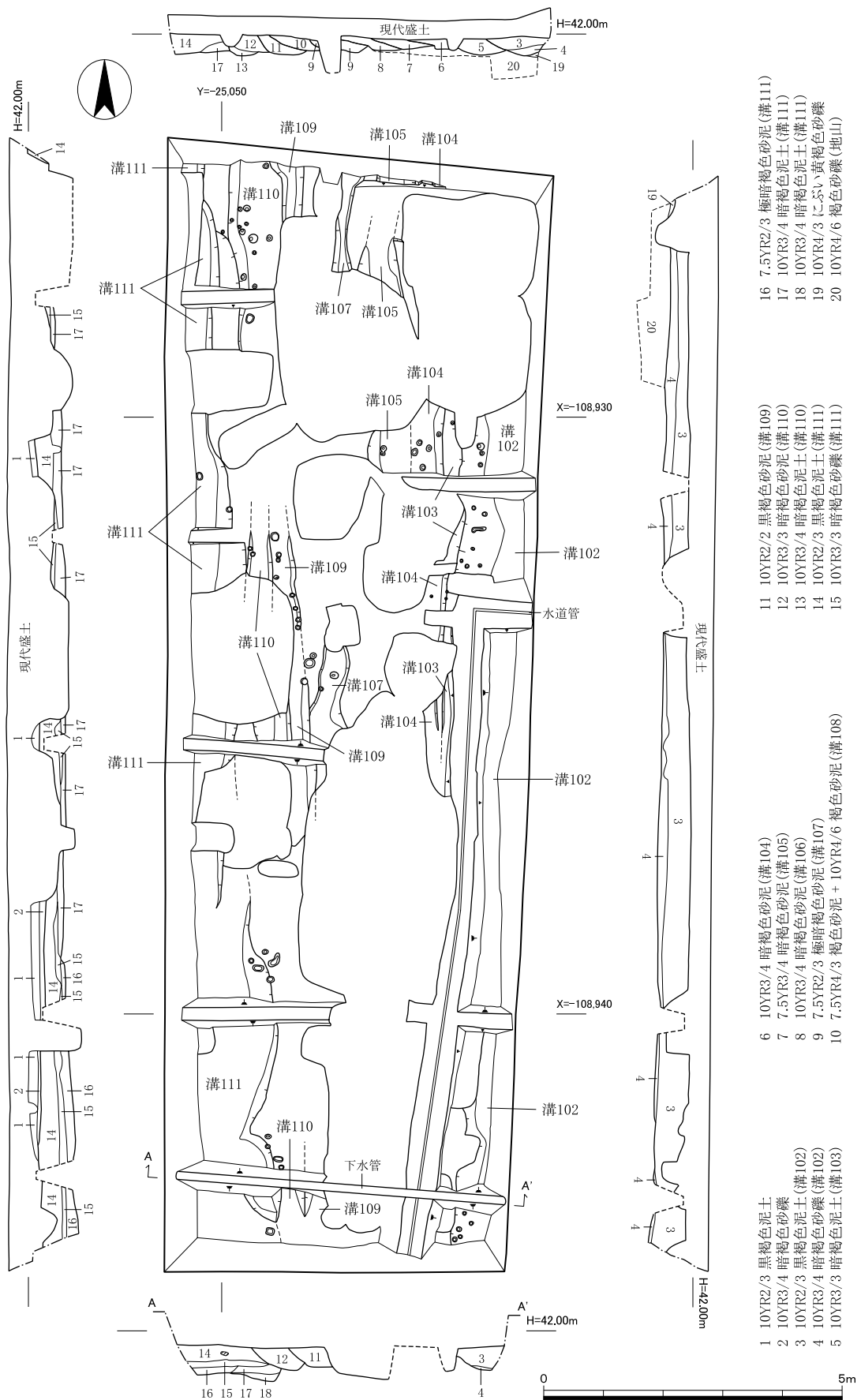
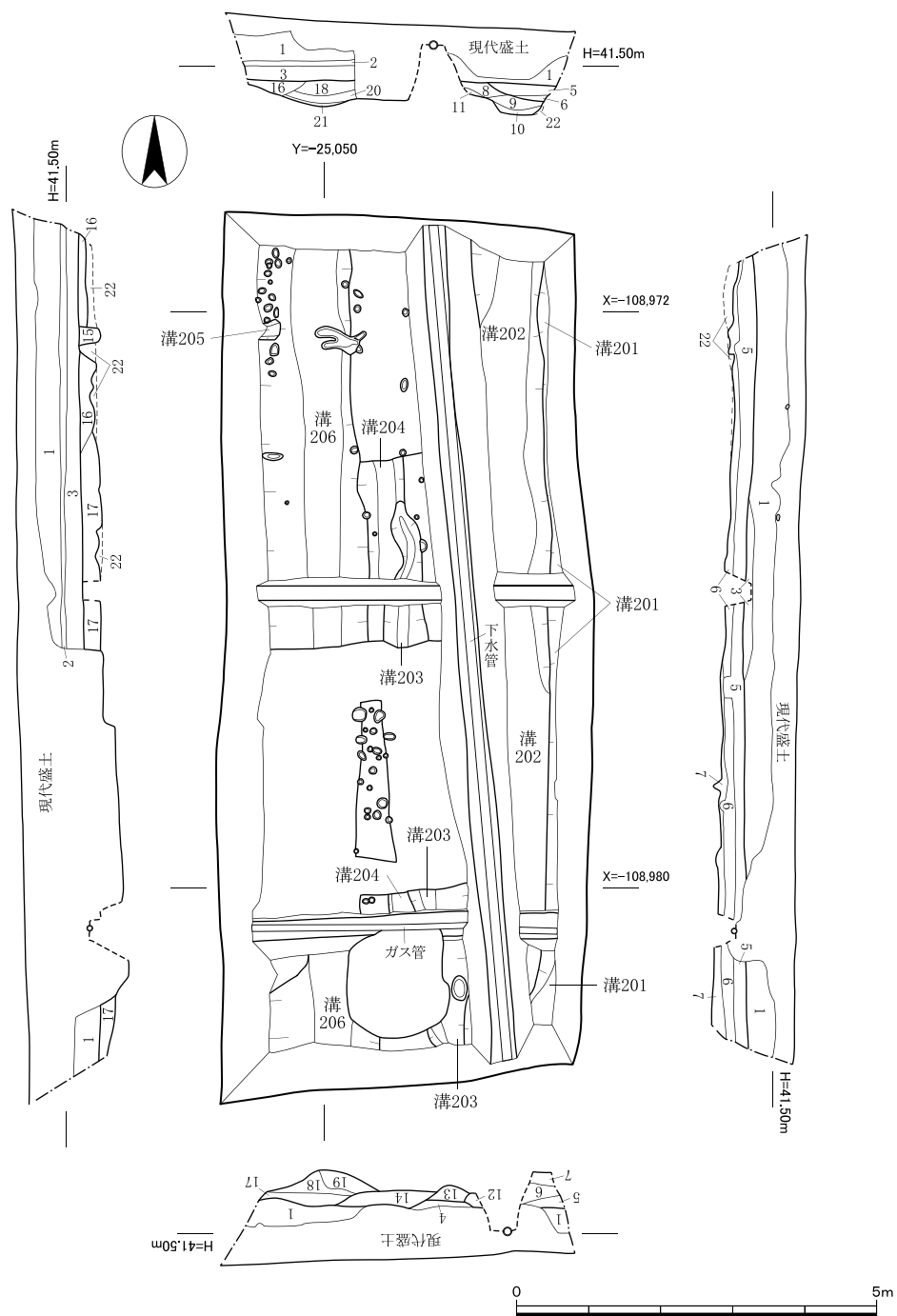


図10 1区北トレンチ実測図(1:100)



- | | | |
|------------------------|---------------------------|------------------------|
| 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | 9 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫(溝202) | 17 10YR3/3 暗褐色砂泥(溝206) |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 10 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥(溝202) | 18 10YR3/2 黒褐色砂泥(溝206) |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 11 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫(溝202) | 19 5Y4/1 灰色泥土(溝206) |
| 4 5Y4/1 灰色泥土 | 12 10YR4/4 褐色砂泥(溝202) | 20 10YR3/3 暗褐色砂礫(溝206) |
| 5 10YR4/2 灰黄褐色砂礫(溝201) | 13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫(溝203) | 21 10YR3/2 黒褐色砂泥 + |
| 6 2.5Y5/1 黄灰色砂礫(溝201) | 14 10YR4/6 褐色砂泥(溝204) | 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥(溝206) |
| 7 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥(溝201) | 15 10YR3/3 暗褐色砂泥(溝205) | 22 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥(地山) |
| 8 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫(溝202) | 16 10YR3/4 暗褐色砂泥(溝206) | |

図12 2区実測図 (1 : 100)

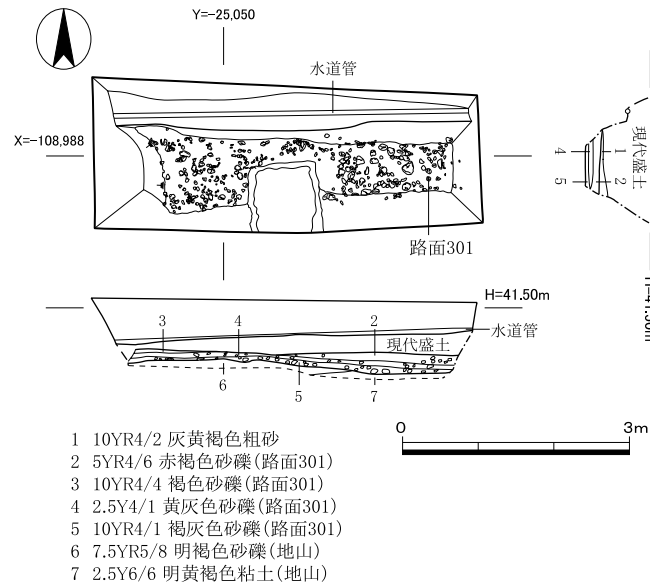


図13 3区実測図（1：100）

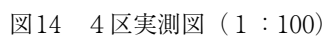
（4）3区（図13、図版4）

3区は春日小路との交差点内の北半に該当し、路面301を検出した。路面301は西端の攪乱と中央南の鉄道関係のコンクリート基礎部分を除いて調査区全面で東西幅約5.6m、南北幅約1m分検出した。今回の調査は図6調査配置図にあるように春日小路北側溝と恵止利小路西側溝の推定交点が含まれるが、2区および南の4区に対応する溝はなかった。

路面301 路面はほぼ平坦であるが、東へ約0.1m低く傾斜する。路面直上は西半が現代盛土で、東半部には流水もしくは洪水によってもたらされたと考えられる灰黄褐色粗砂が南に向かって薄く堆積していた。路面は径1cmほどの細かい褐色砂礫で突き固められた最上面の第1面が北西部に一部残存していた。一部を断ち割ったところ、この路面下に3層の拳大の礫が混じる砂礫層がやや東に低く平行に0.3～0.4m堆積していた。これらは第1面に比べて礫が大きいことや、3区地山面が南に位置する4区の遺構検出面より0.15m低いことから、路面の時期差とみるよりも路面を嵩上した造成土の可能性がある。少量の須恵器などの破片が出土した。

（5）4区（図14～16、図版5・6）

4区北端部は春日小路南側溝と恵止利小路西側溝の推定交差点部に含まれる。鉄道などによる攪乱が多いが、調査区東半部で調査区を南北に貫通する中世の溝402～404を検出した。調査区北西隅部の春日小路南側溝の該当箇所ので浅い落込み406を検出した。また、落込み406の南端と東端を区切る、T字状につながる東西溝405と南北溝404を検出した。落込み406の下面から溝408・409を検出した。これらの溝は恵止利小路西側溝推定線で検出した春日小路交差点南端から南流する南北溝411につながっていた。溝411に切られた溝412を最西端で検出した。この溝は南端まで延び、恵止利小路西側溝推定地に位置する溝である。溝411の上から溝419・420が掘り込まれてい



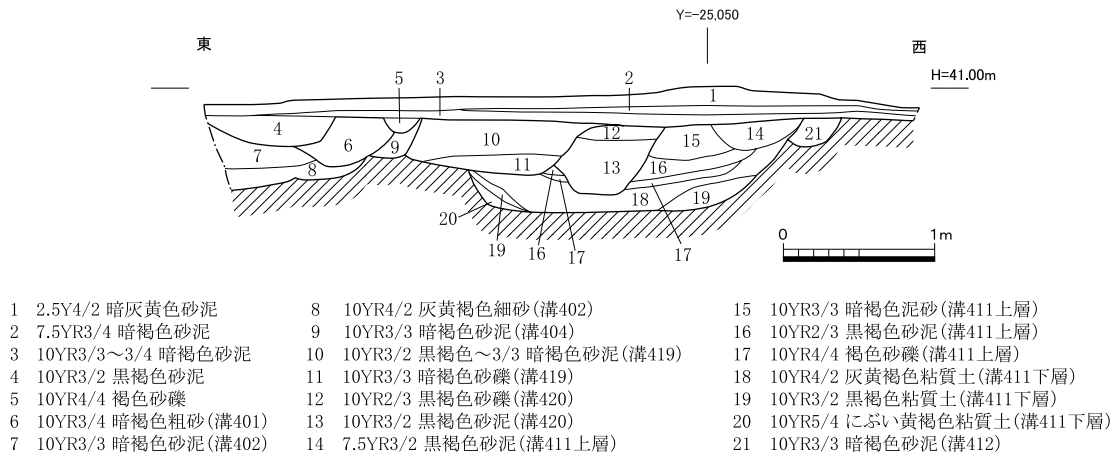


図15 4区中央セクション断面図(1:50)

た。溝411・419・420の堆積層には砂礫層を含み少なくとも3回の洪水に見舞われたものと考えられる。最後に春日小路交差点北西隅部に砂礫層が露出していたので断ち割り、地山層であることを確認した。なお、北壁と南壁は攪乱が多いため、中央のガス埋設管に設けた中央セクション断面図(図15)を掲げておく。

溝401～403 溝401は溝402の上に成立している新しい溝で、幅0.7m、深さ0.4mを測る。この溝は主に暗褐色粗砂で埋まっており、5区では地山を掘り込むまで深くなる溝である。調査区東端で検出した溝402は検出幅1.6m、深さ0.4mであるが、東肩が調査区外となるので幅は不明である。上層に礫混じりの暗褐色泥砂、下層に灰黄褐色細砂などが堆積していた。調査区北に延びるが、北に設けた3区で北延長を検出していないので、2区で検出した東端溝群とのつながりは明らかではない。溝403は幅0.9m、深さ0.2mの調査区北壁から南東方向に南下する。北壁南4m付近で溝402に切られ消滅している。

溝404・405 (図16) 溝404は幅1m、深さ0.3mの浅い溝で、東の溝403と同じく西に振れて調査区北外に延びている。また、東西溝405とつながる。埋土は上層が黒褐色泥砂で下層が暗褐色砂泥である。溝405は春日小路南側溝北端推定線約1m南に該当する東西溝で、調査区北壁南約1mで検出した。溝404下層と同じ黒褐色砂泥で埋まった幅0.4m、深さ0.2mの浅い溝で、南北溝404とT字状につながっていた。常滑産甕片が出土している。

落込み406 (図16、図版6) 春日小路南側溝推定地で南北1m、東西約2.5m、深さ0.2mの落込み406を検出した。この落込みに堆積した層は径10cm前後の礫を含む2層の暗褐色砂泥で、底は平坦である。落込みより深い南北溝404・東西溝405によって東端と南端が区切られている。図16にあるように堆積土に径10cm前後の礫を多く含むことから当初は春日小路交差点路面と考えたが、春日小路南側溝推定地に該当することや、3区で検出した褐色系の堅い路面に比べて堆積土の暗褐色砂泥が柔らかく、底が周辺の地山層より低いことから、春日小路南側が南に傾斜していたところに堆積したか、もしくは春日小路南側溝の底そのものである可能性が考えられる。

溝408・409 (図版6) 落込み406下から2本の南北溝を検出した。溝408は幅約0.6mで、南方に向かって溝411上層につながる。北端は西に折れて立ち上がって消滅する。溝底で10世紀半ば

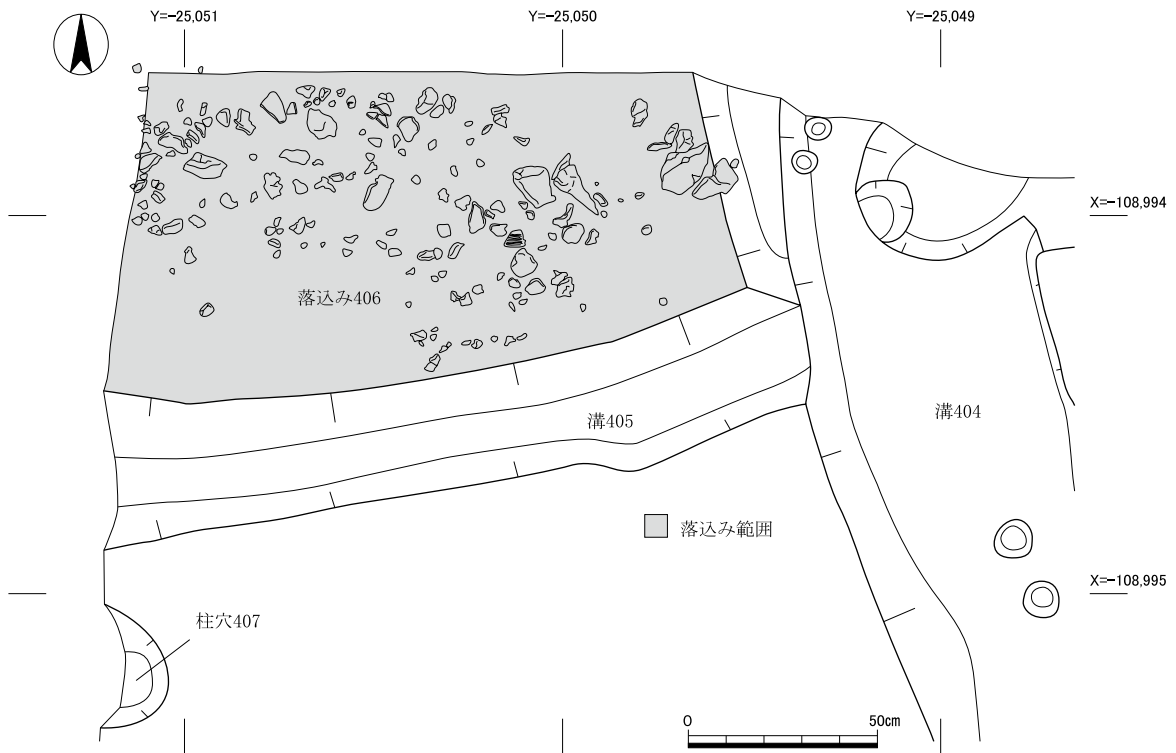


図16 4区溝404・405、落込み406平面図（1：20）

から後半の土器群が出土した。落込み406から溝411への導水部になる可能性が高い。溝409は幅0.6m、深さ0.1mの浅い南北溝で、南方が狭まる。南端は土坑410によって切られており、南側の溝411・412とのつながりは不明である。

溝411・412（図版6） 恵止利小路西側溝推定地で検出した2条の南北溝である。溝411は幅約2.8m、深さは約0.6mの大溝で、第1面で検出した東西溝405下で立ち上がる。溝上中央と東に重複する2回の掘り返しが認められるが、出土遺物は全て10世紀前半の遺物である。最下層の暗褐色泥土から10世紀前半の完形を含む土師器群が出土した。溝408の土器群よりもやや古い様相を帯びている。洪水によると考える暗褐色砂礫層が挟まれて存在する。

溝412は検出幅0.8m、深さ0.3mの4区最古の南北溝である。浅い溝内には均一な暗褐色砂泥が埋まっていた。10世紀前半に埋まった溝411に東肩が切られているが、恵止利小路西側溝推定地に該当し、復元幅は1m内外である。時期は確定できないが溝411より古く、小路側溝幅3尺とする『延喜式』の規定に収まる。

溝413 春日小路の築地中心推定線より南約7mの位置で、幅0.6m、深さ0.2mの暗褐色砂泥で埋まった東西溝を検出した。この溝は南北溝412につながり、宅地からの排水施設の可能性がある。平安京宅地割では十六町北一行東一門に該当するが、町内の分割は不明である。

溝419・420 溝411に重複する2条の溝である。いずれも10世紀代の洪水と考える砂礫層が堆積する。溝411中央上の溝419は溝420東肩を切る。幅1.3mの深さの溝で、東肩を溝404に切られている。上層に暗褐色砂泥、下層に暗褐色砂礫が堆積する。溝420は検出幅0.7m、深さ0.5mを測る。上層に黒褐色砂礫、下層に黒褐色砂泥が堆積する。

(6) 5区 (図17、図版7)

5区は4区の南延長に位置するが、攪乱によってほぼ半分が消滅している。他の調査区と異なり、耕作土床土の下に黒褐色泥砂が広範に堆積していた。東部は4区東端で検出した砂礫層がなく、黄色系土のブロックが混入しているため、人為的に埋められた可能性も残るが、鉄道などによる削平が激しく確定できない。

溝501～504 溝501は4区南断面に残る溝401(第12層)が深くなって現れた比較的新しい溝である。幅0.6、深さ0.3mで、均一にぶい黄褐色泥土が堆積する。溝502は褐色泥土が堆積する幅1.8m、深さ0.3mの溝である。4区溝402の南延長である。溝503は幅0.8m、残存深さ0.1m、黒褐色砂泥が堆積する。溝404に対応する可能性がある。溝504は幅1.6、深さ0.3mで主に黒褐色砂泥が堆積する。4区から始まる大溝411に対応する可能性がある。

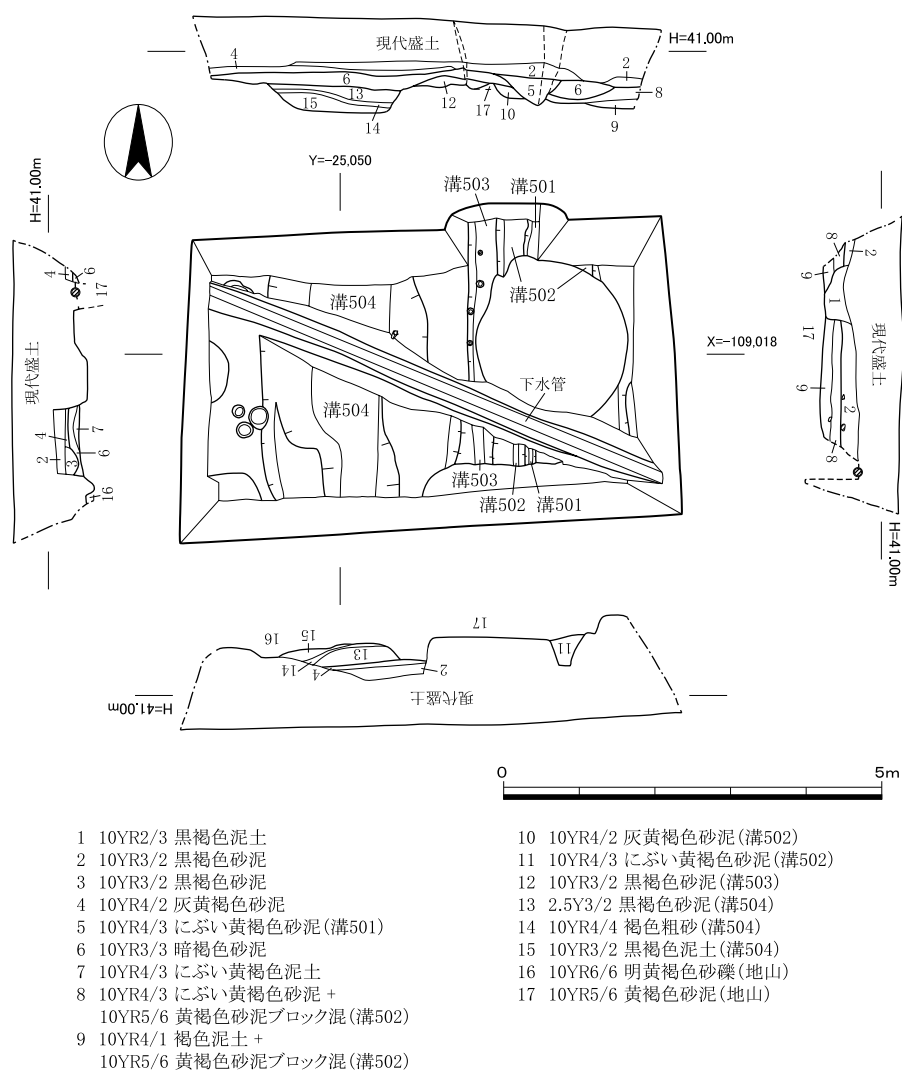


図17 5区実測図 (1:100)

(7) 6区 (図18～23、図版8～12)

6区は5区の南約65mに位置し、3回に分けて調査した全長31mに及ぶ長い調査区である。5区との間に1987年度の当研究所が行った調査区があり、恵止利小路西側溝を検出している。その南約20mの6区で恵止利小路西側溝推定位置から平安時代前半の溝603を検出した。また、溝603

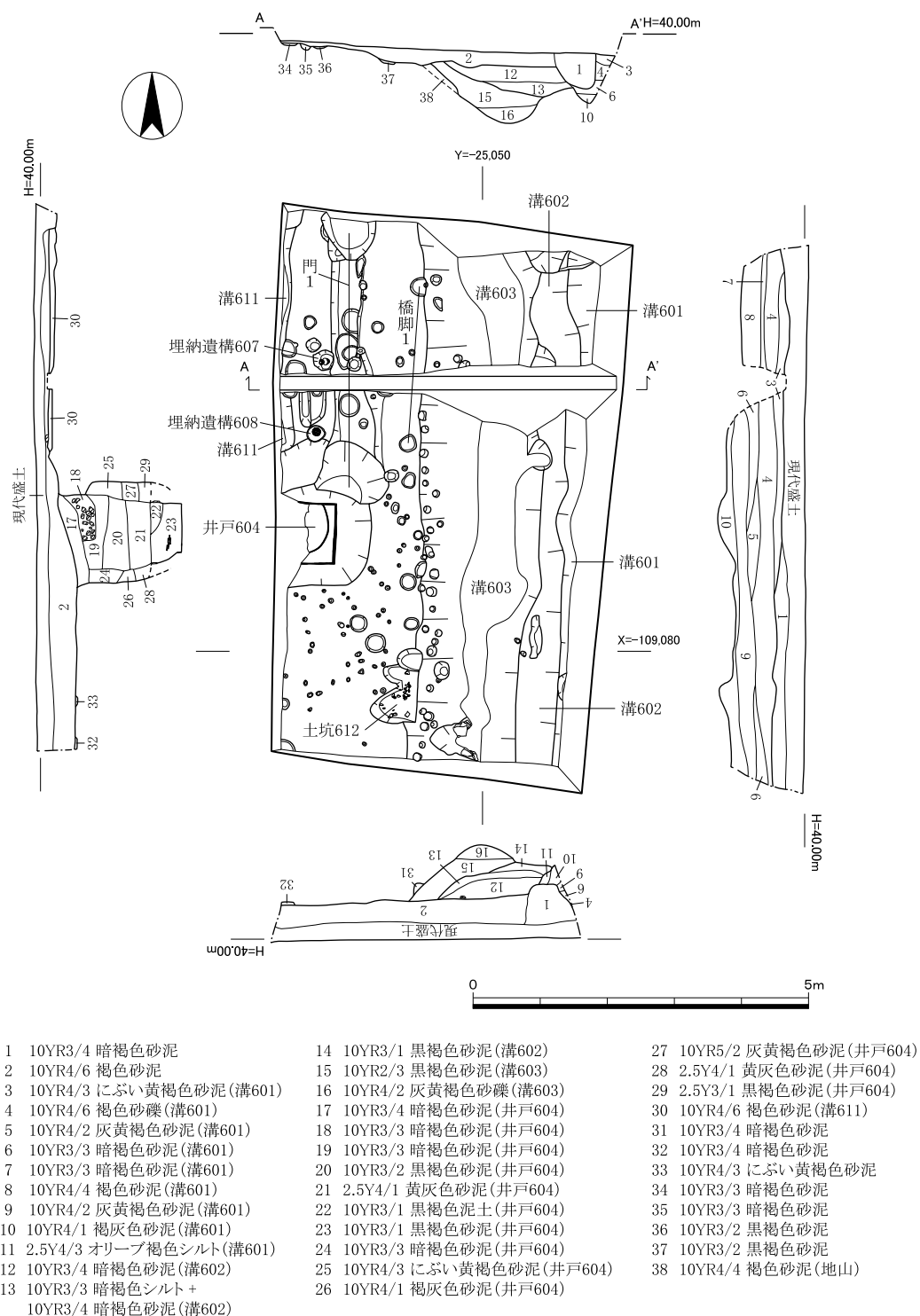


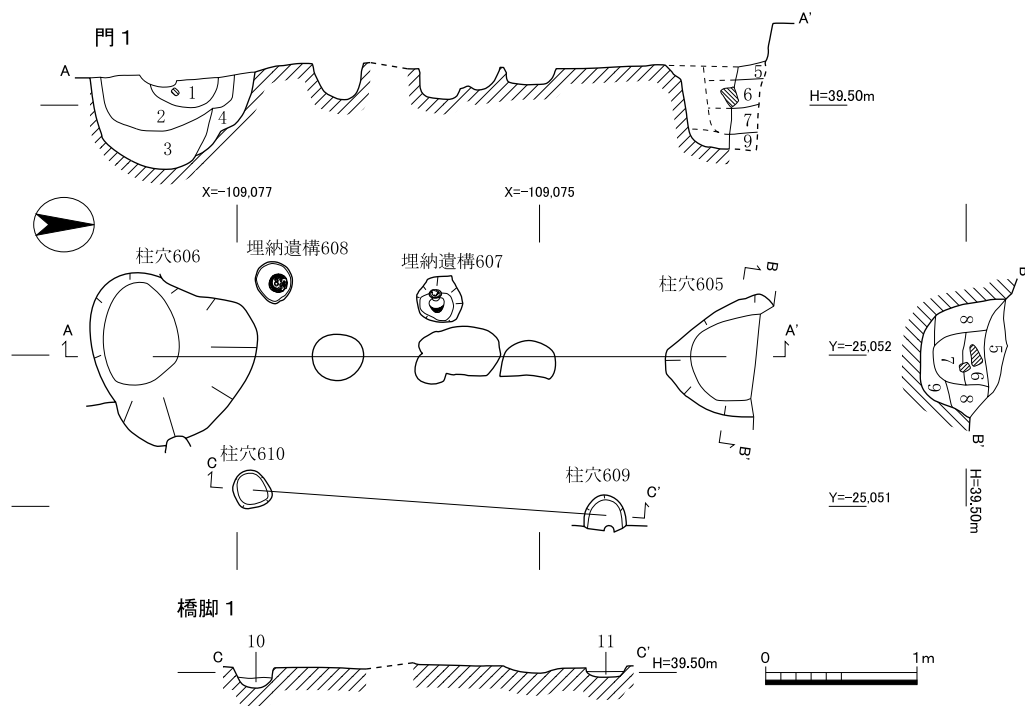
図18 6区北トレンチ実測図 (1:100)

の東肩を切る溝602や、その東肩を切る溝601を検出した。これらの溝群は5区や1987年度調査で検出した溝群よりも深いのが特徴である。また、6区は二条三坊十五町敷地東端部を含み、東一行北六門の東端から門跡・2基の埋納遺構・2基の柱穴からなる橋脚・1基の井戸跡を検出し、東一行北七門の東端から2列の柱列・土坑・東西排水施設などを検出した。

溝601～603（図版11） 溝601は調査区東端の褐灰色泥砂系で埋まった溝である。中世後半の遺物が出土しているが、途中で調査区東壁外となるので溝底、溝幅ともに不明である。溝602は溝603東肩を切る幅1.9m以上、深さ0.5mの暗褐色泥砂系で埋まった溝である。平安時代前半の遺物に混じって中世の遺物が出土した。溝603は幅1.6m以上、深さ0.9mを測る。黒褐色系砂泥が主に堆積していた。10世紀までの遺物が出土している。

門1（図20、図版12） 門1は径約0.7m、深さ約0.65mの深い柱穴605・606からなり、心々で約4mを測る。柱穴605から北2m強が東一行北五門と六門の境に該当する。埋土は暗褐色泥砂で、柱抜き取りの痕跡がある。拳大の石が埋まっていた。

橋脚1（図20、図版12） 門1の東1m、溝603西肩部で、門に平行する心々2.3mの2基の柱穴609・610を検出した。径約0.4m、残存深さ0.2mである。恵止利小路西側溝に架けられた門正面の橋脚跡であろう。



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ2～3cmの礫微量混、炭・土師片少量混
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭・土師片微量混
- 3 10YR4/3 暗褐色砂泥 炭微量、土師片少量混
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質 + 2.5Y6/6明黄褐色砂泥まだらに少量混 φ2cmの礫・炭・土師片微量混
- 5 10YR4/4 褐色砂泥 φ3～5cmの礫・土師片少量混
- 6 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 炭・土師片多量中量混
- 7 10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質 + 2.5Y4/2暗黄灰色砂泥 やや粘質混
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 + 2.5Y6/6明黄褐色砂泥まだらに中量、φ2cmの礫少量混
- 9 2.5Y4/2 暗黄灰色砂泥 やや粘質 φ3cmの礫少量混
- 10 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質 + 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥ブロック混
- 11 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 φ0.5～2cmの礫多量混

図20 6区門1・橋脚1実測図（1：50）

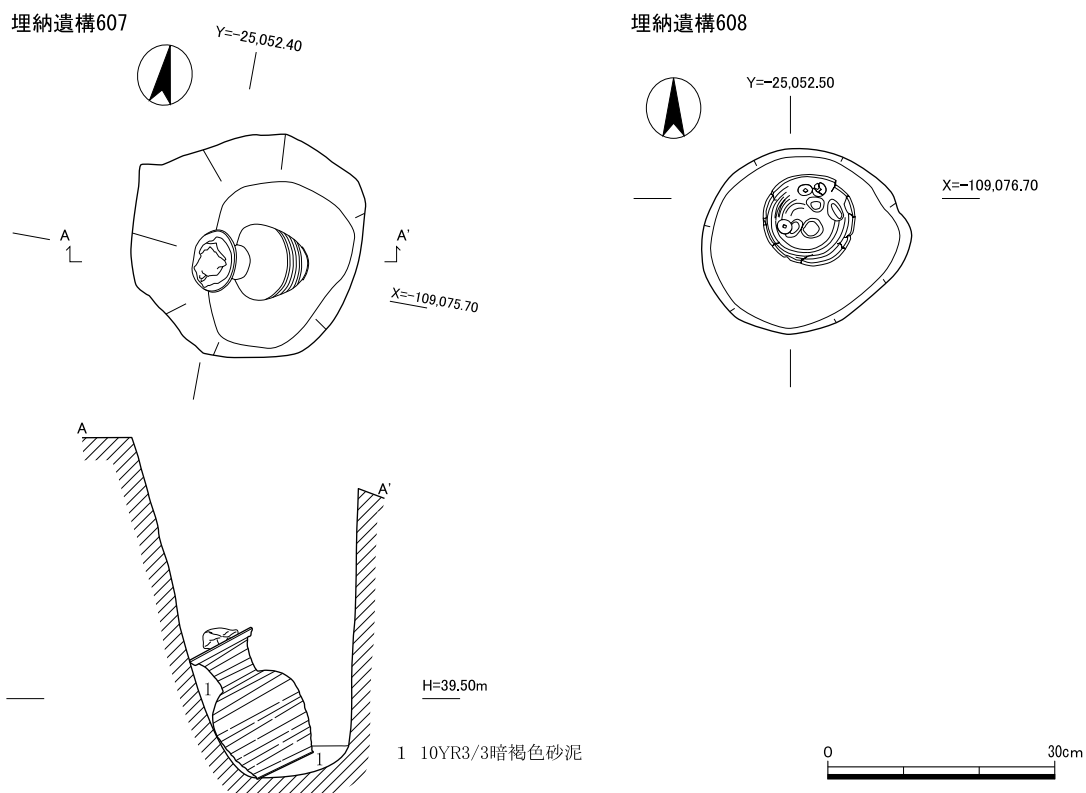


図21 6区埋納遺構607・608実測図（1：10）

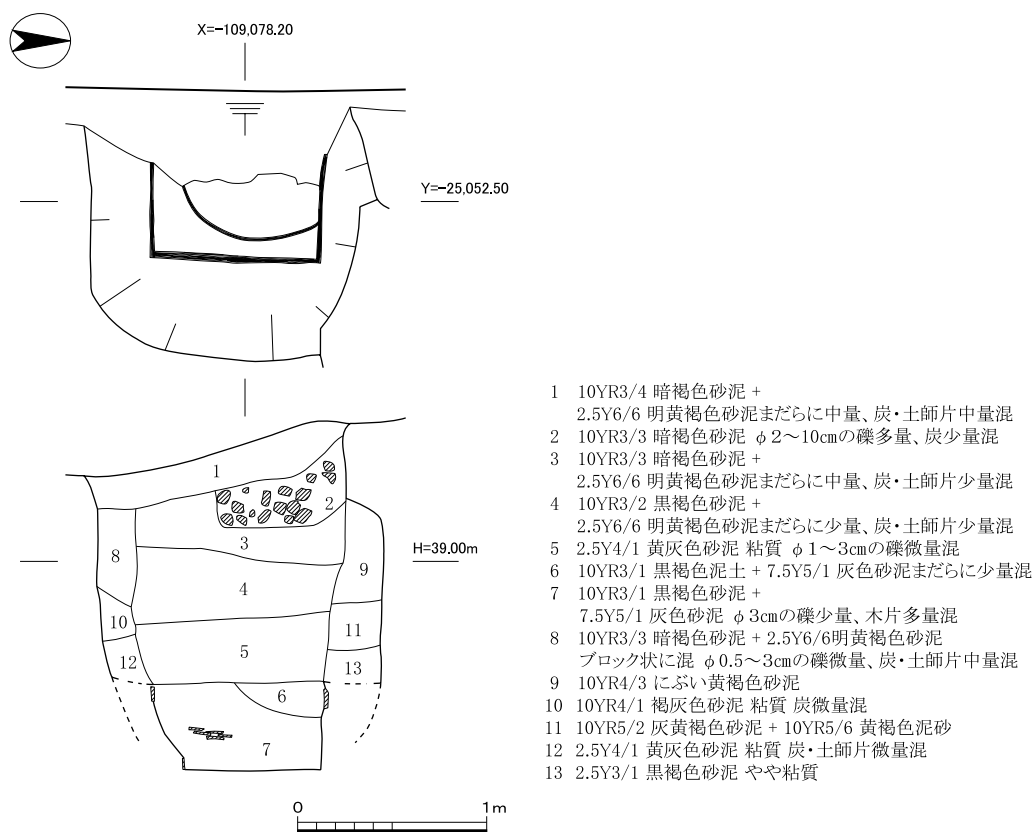


図22 6区井戸604実測図（1：40）

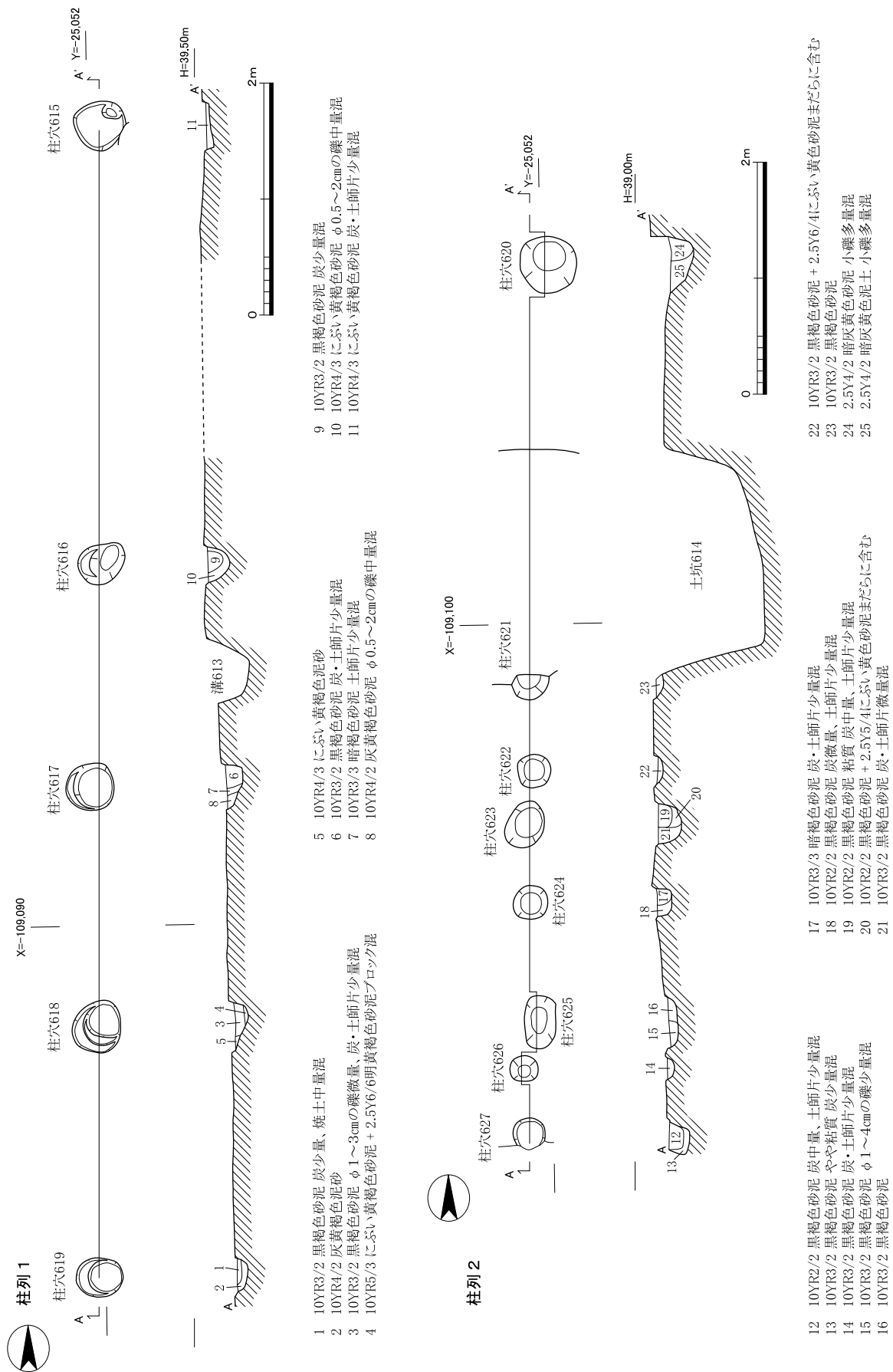


図23 6区柱列1・2実測図 (1 : 50)

埋納遺構607・608(図21、図版12) 門の内側から検出した南北に並ぶ2基の埋納遺構である。埋納した壺や壺に納めてあった錢貨から10世紀前半(Ⅲ期古)と判断した。埋納遺構607は径0.3m、深さ0.45mの深い穴に、完形の須恵器瓶を0.1mの礫で蓋をして据えてあった。埋納遺構608は埋納遺構607の南で検出した。径0.25m、残存深さ0.1mの浅い穴に、須恵器瓶が据えてあった。瓶底には径約3cmの円形砂岩4個の上に延喜通寶(初鑄907年)を3枚乗せた状態で出土した。瓶上半部が飛ばされていたことから近辺一帯は削平を受けている。

井戸604(図22、図版11) 調査区西壁に掛かる掘形の一边約1.5m、深さ約2mの方形縦板組井戸である。井戸内から9世紀半ば(Ⅱ期古)の遺物が出土している。井戸北東隅が10世紀前半(Ⅲ期古)と考える門1の柱穴606に切られているので門1より古い。底に径約1m、高さ約0.3mの大きな曲物の上に方形の横枘が残存していた。側板は崩壊し、黒褐色砂泥で埋まった曲物内に落ち込んでいた。上層に拳大の礫で埋め戻した痕跡がある。曲物の材質は、板目材のヒノキで、側板は板目材のスギである。横枘については崩落の危険性があったので不明である。この井戸の東掘形は築地推定線より0.3m東に出ているが、井戸枘は推定線内に収まる。

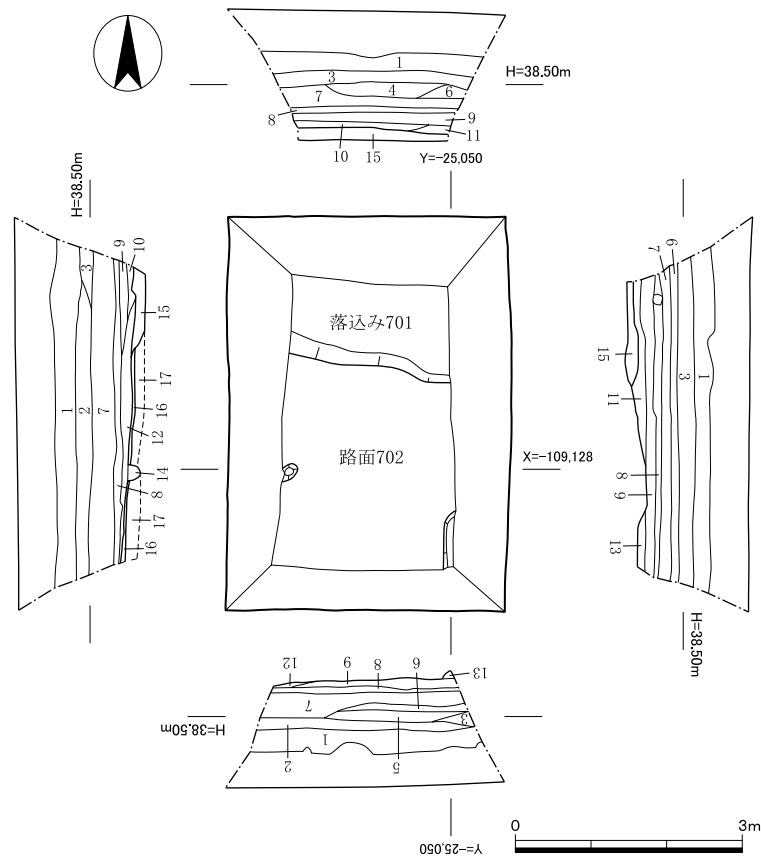
柱列1・2(図23) 6区南トレンチの恵止利小路築地推定線上で2列の柱列を検出した。柱穴615～619からなる北側の柱列1は、全長10mで5基の柱穴からなる。柱穴615と柱穴616間の柱穴は水道管などで検出できなかったが、2m前後間隔で並ぶと考えられる。柱列1南の柱列2は8基の柱穴620～627からなる。やや東に振れ、等間隔で並ばない。重複があるものと考えられる。いずれの柱列も径0.3m前後、深さは0.2m以内で浅いことから、近辺はかなりの削平を受けている可能性が高い。埋土は暗褐色から黒褐色砂泥系である。柱穴621は土坑614に切られていた。

溝611・613・630 溝611は調査区西壁に沿って検出した。残存幅約0.2m、深さ0.1mの浅い溝である。門1西約1mで平行関係にあることから関連する可能性もあるが、南端が削平によって消失しているため確定できない。東西溝613は南北溝603に切られた幅約0.8m、深さ約0.3mの溝である。北六門と七門境南1.5m付近で検出した。柱列1の柱穴616・617が跨いでおり、下層の黒褐色砂礫を0.3m台の石を含む礫で埋めていた。東方向に下がっているため、宅地内からの排水施設の可能性が高い。溝内から9世紀半ばの遺物が出土した。溝630は西壁から南東方向に延びる幅0.3m、深さ0.4mの溝であるが、途中で埋設管下に入るため、南北溝との関係は不明である。にぶい黄褐色砂泥が堆積し、時期不明の土師器小片が出土した。

土坑614・629 土坑614は井戸604から南約21mで検出した一边2m四方、深さ0.8mの方形土坑である。井戸604と同じく掘形東端が恵止利小路築地中心推定線より東に約0.3m張り出ている。底面は平らで、均一な黒褐色粘質土で埋まっていた。土坑629は土坑614に切られた不定形な暗褐色泥土で埋まった土坑である。石製品などが出土しているが性格は不明である。

(8) 7区(図24、図版13)

7区は大炊御門大路との交差点中央に位置する。現地表下1.4mで路面702を検出した。また、調査区北で路面を切る落込み701を検出した。路面上には中世の洪水層と考えられる砂礫・砂泥の



- | | | |
|------------------|-------------------|-----------------------------|
| 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 13 10YR5/2 灰黄褐色泥砂 |
| 2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 8 10YR3/3 暗褐色砂礫 | 14 10YR3/2 黒褐色砂礫 |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 9 10YR3/3 暗褐色泥砂 | 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫(落込み701) |
| 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 10 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 | 16 10YR6/1 褐灰色粗砂(路面702) |
| 5 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 11 2.5Y7/1 灰白色砂礫 | 17 2.5Y7/1 灰白色粗砂(地山) |
| 6 10YR3/2 黒褐色砂礫 | 12 10YR3/3 暗褐色泥砂 | |

図24 7区実測図(1:100)

互層が水平に堆積していた。洪水層から小型のコースター型土師器皿や龍泉窯産青磁破片が出土した。

路面702 路面は平坦で、にぶい黄褐色砂礫の地山直上に堅い褐灰色粗砂が面を形成していた。

落込み701 北壁に沿って検出した深さ0.15mの浅い遺構である。南肩は路面の褐灰色粗砂層を切っていた。オリーブ褐色砂礫の堆積で須恵器片が出土している。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は、平安時代前期から中期までの土器類・瓦類が大半を占めるが、出土量は東の溝ほど少なくなる傾向がある。土器類は西端溝から緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器の出土比率が高く、前年度調査に比べ時代判定に有効な完形土師器の出土比率が高いことが特徴である。また、9世紀代の須恵器製風字硯・緑釉陶器耳皿・緑釉陶器獣足部なども出土していることから、当時の周辺住人の社会的地位を示すものと考えられる。また、東側の砂礫の埋土溝からは鎌倉時代と考える常滑甕・白磁・瓦器などが出土している。

瓦類は平安時代中期までに収まり、緑釉丸瓦小片が5点出土している。

銭貨は6区で検出した門跡内側に埋納された埋納遺構608出土壺から延喜通寶（初鑄907年）が3枚出土している。

木製品は6区の井戸604から木槌が出土している。

その他、縄文時代の暗赤色チャート製石鏃が1点出土している。

以下、土器類は一括遺物出土遺構ごと、土師器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器の順に概説し、次に調査区全体の主な出土遺物を概説する。輸入陶磁器・銭貨・石製品については後で一括して概説する。

(2) 土器類（図25・26、図版14・15）

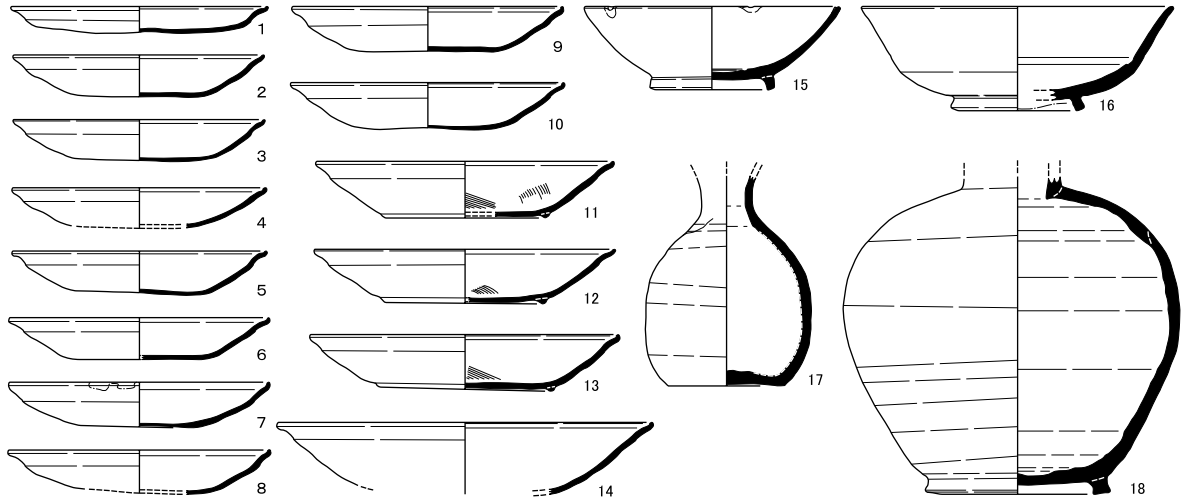
溝111下層（1～18） 1区の溝111下層から出土した一括遺物である。時期は10世紀前半（Ⅱ期新）である。

表4 遺物概要表

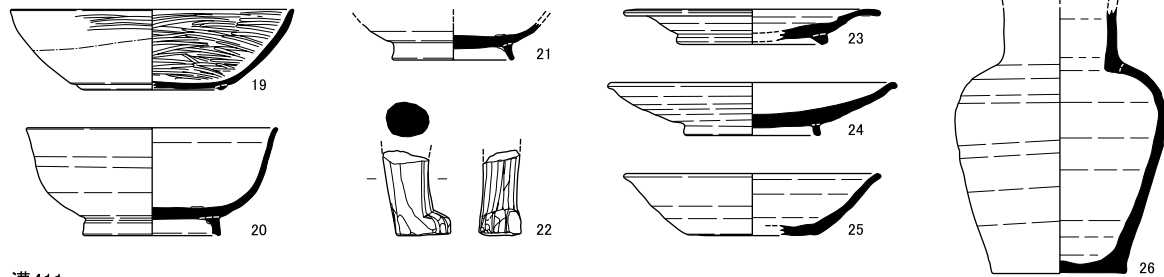
時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石鏃		石鏃1点		
平安時代前半 (9～10世紀)	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、木製品、銭貨、金属製品、石製品		土師器27点、須恵器13点、黒色土器6点、緑釉陶器14点、灰釉陶器9点、白色土器1点、輸入陶磁器21点、瓦類5点、木製品1点、銭貨3点、石製品6点		
平安時代後半 (10～11世紀)	土師器、須恵器、黒色土器				
中 世	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、石製品		輸入陶磁器1点		
合 計		69箱	108点（9箱）	1箱	59箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

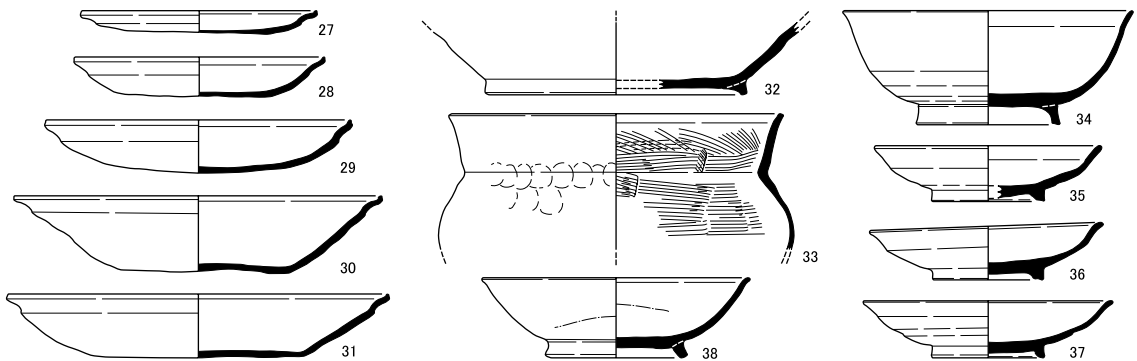
溝111下層



溝111上層



溝411



溝408

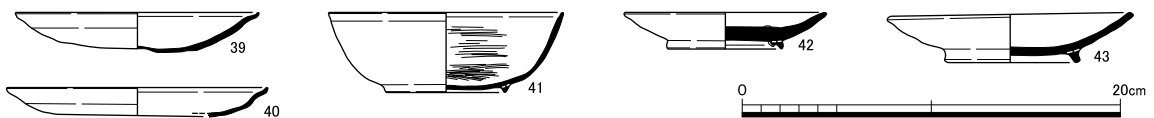


図25 溝111・411・408出土土器実測図（1：4）

1～10は土師器皿である。口径13.3～14.5cm、高さ2.1～2.5cmで、1だけ器高1.4cmと低い。11～13は逆三角形の高さ約0.2cmの高台を貼り付けた土師器杯である。杯は皿に比べ大型で、口径15.8～16.4cm、高さ2.9～3.0cmを測る。14は口径19.9cm、高さ3.8cmの大型土師器杯である。いずれの土師器も器表は明橙色、胎土は密で黄灰色である。器厚0.2cm内外で薄く作り、口縁部を外反させ端部をつまみ上げている。以下に述べる皿・杯群も同様に、皿と杯の差が不明瞭な時期の土師器群である。

15・16は緑釉陶器の椀である。15は口径13.6cm、高さ4.4cmの椀で、口縁外端部に篋を押し付け

て輪花をつくる。胎土は密であるが、焼成はやや甘く明るい灰白色である。内面見込み部に径3.5cmの沈線による圈線が巡る。畳付部を除き全面に淡い緑釉が掛かる。内面ミガキ痕、外面腰部ケズリ。高台内面に糸切り痕が付き、断面台形の高台を貼り付ける。猿投産である。16は口径16.5cm、高さ5.5cmの椀である。腰部が折れて立ち上がり、内面立ち上がり部に括れた圈線を巡らす。胎土は密で、焼成は堅い。内面外面ともミガキの痕跡があり、釉の色調はやや暗い灰緑色である。高台は断面台形であるが削り出しの可能性がある。高台内面に釉が掛かる。洛西産か。

17は頸部が窄まる灰釉陶器瓶である。底径6.2cm、残存高さ11.1cmで、口縁部を欠く。胎土は密で灰白色で、焼成もよい。釉の色調は淡い灰緑色である。底部外面に糸切り痕が付く。胴部外面半ばまで釉を掛ける。美濃産であろう。

18は須恵器壺で、底径9.8cm、残存高さ16.8cmで頸部を欠く。高台は貼り付けで、腰部外面に軽いケズリを施す。胎土の表面は青灰色であるが内部は暗赤色で、焼成は堅い。ナデによる肩部を除き胴部および内面にロクロ目が残る。

溝111上層（19～26） 砂礫層を含む上層から出土した遺物である。

19は黒色土器A類椀で、口径15.0cm、高さ4.3cmである。内面全体にミガキを施して炭素を吸着させている。逆三角形の高台を貼り付ける。体部外面は口縁部に炭素が吸着する他は胎土の赤みがかった橙色である。

20・21は緑釉陶器椀である。20は口径13.3cm、高さ5.7cmを測る。胎土は密で灰色がかかったにぶい黄橙色で、焼成はやや甘い。高台は畳付け部を2段に作る貼り付け輪高台で、底部に糸切り痕が残る。メアトが見込み部に3点付く。胴部は腰から急に立ち上げ端部を少し外反させる。釉は暗緑色で、高台内面まで全面に掛かる。近江産である。21は端部を欠く高台径6.4cmの緑釉陶器椀である。高台は外反する細い輪高台で貼り付けている。内面にミガキを施す。メアトが見込み部に2点付く。釉はかせているが濃い緑色で、高台内面まで全面に掛かる。美濃産であろう。

22は緑釉陶器の獣足片である。脚部と足部からなり残存高さ4.5cmである。胎土は密で堅く灰白色であるが、足底付近表面はやや橙色に変化している。断面形楕円の脚部に縦方向の面取りを施すが、正面はミガキで丸く仕上げられている。足部は篋による沈線で指を表現する。足裏を除いて淡緑の薄い釉を掛ける。猿投産の壺か盤の獣足であるが類例に乏しい。

23・24は灰釉陶器皿である。23は口径13.6cm、高さ1.9cmの段皿で、口縁部を外反させ長く延長させる。胎土は密で灰白色である。焼成は堅い。体部内外面にミガキを施す。釉は口縁部に残存するだけである。自然釉の可能性があり、緑釉素地製品の可能性がある。輪高台をやや外反させ貼り付けて作る。美濃産であろう。24は口径15.3cm、高さ2.8cmの皿である。胎土は密でやや暗い灰白色。焼成は堅い。口縁端部を少し外反させて丸くおさめる。貼り付け高台で、やや外反した輪高台に作る。内面全面に灰緑色の自然釉が掛かる。重ね焼きの最上部に置かれた猿投産の皿であろう。

25は須恵器杯である。口径13.6cm、高さ3.3cmを測る。胎土は灰白色で、焼成もやや甘い。体部が喇叭状に開く。底部に右回りの篋起こし痕が付着する。10世紀代の須恵器である。26は須恵器瓶である。口縁部を欠くが、高さ14.1cm、底径は7.0cmである。胎土は灰色で、焼成が甘く内面外

面とも黒く変色している。平底で糸切り痕が付く。

溝411（27～38） 4区の溝411最下層から出土した一括遺物である。遺物の時期は10世紀半ば（Ⅲ期古）に相当する。

27～29は土師器皿である。27の口径12.6cm、高さ1.3cmの低い土師器皿と、28の中型の口径13.3cm、高さ2.2cmと、29の16.3cm、高さ2.8cmの大型の3タイプに分かれる。30・31は土師器杯で、30は口径19.5cm、高さ4.1cm、31は口径20.3cm、高さ3.4cmを測る。32は口縁部を欠いているが、高台径13.9cm、残存高さ3.8cmの高台付土師器盤である。

33は内面全面にミガキを施し炭素が吸着する黒色土器A類甕である。口縁部は外に斜めに伸びる。肩部より下を欠く。外面肩部は指によるオサエが肩部に巡る。胎土は灰褐色である。炭素付着は胴部外面になく褐灰色で煤の付着がある。口径17.7cm、残存高さ7.2cmを測る。

34～37は緑釉陶器である。34は口径15.4cm、高さ6.1cmの椀である。輪高台で、やや外反する高さ1.0cmの高台をナデで貼り付けで作る。腰部外面のケズリによって丸く作る。胴部外面にミガキの痕跡が窺える。焼成は堅く灰白色で、胎土も密で須恵質である。高台部も含めて全面に濃い緑釉が掛けてある。近江産と考えている。35～37は皿である。35は口縁部が腰から折れ曲がって立ち上がり、内面に段が付く。口径12.0cm、高さ3.0cmを測る。胎土は淡灰色で須恵質、釉調は透明でやや薄い灰色である。高台は削り出しの輪高台で逆三角形に近い。高台内面に釉は掛からない。篠産である。36は腰部外面境から立ち上がり、端部を外反させて作り、口径12.4cm、高さ3.1cmを測る。内面全面と外面立ち上がり部にミガキを施す。胎土は淡灰色で須恵質。釉は薄く掛かり、釉調も薄い淡緑である。台形の削り出し輪高台で、高台内面にも一部釉が掛かる。篠産である。37は口径13.2cm、高さ3.0cmで、削り出し輪高台皿である。篠産で、焼成がやや甘く、胎土は黄色かった淡灰白色である。

38は口径14.2cm、高さ4.3cmの灰釉陶器椀である。腰部は丸くやや外反する。高台はやや外反する貼り付け輪高台で、高台内面に糸切り痕が残る。体部にわずかな灰釉が残る。

溝408（39～43） 溝408底で出土した一括遺物群である。時期は10世紀半ばから後半（Ⅲ期中）である。

39・40は土師器皿である。39は口径12.9cm、高さ2.1cm、40は口径13.8cmで39より大きいが高さが低く1.6cmである。色調が溝411の土師器と比べてやや褐色化している。

41は内面全面にミガキを施し炭素が吸着する黒色土器A類の椀である。口径12.4cm、高さ4.3cmで、逆三角形の高台を貼り付ける。体部外面は口縁部に炭素が吸着する他は胎土の赤みがかった橙色である。

42は口径10.8cm、高さ2.0cmの緑釉陶器皿である。底が約1cmで厚く、体部の出が短い。高台は貼り付け輪高台で、内側に段を付ける。内面見込みに浅い沈線が巡る。濃い緑の釉が掛かり、釉は高台内側まで及んでいる。トチン跡が内面に2点残る。近江産である。

43は口径13.0cm、高さ2.7cmの灰釉陶器皿である。高台はやや外反する貼り付け輪高台で、高台内面に糸切り痕が残る。体部にわずかな灰釉が残る。胎土は灰白色で密である。美濃産であろう。

井戸604（44～59） 井戸から出土した一括遺物で、時期は9世紀半ば（Ⅱ期古）の遺物であると考えている。

44は土師器杯である。口径17.6cm、残存高さ3.3cmを測る。器表が荒れているが、体部外面にケズリの痕跡がある。器厚は10世紀の土師器よりやや厚く、口縁部を外にほぼ直線に延ばし、端部をつまみ上げて作る。胎土はやや灰黄褐色で、焼成は良好である。椀と杯の差が不明瞭になる9世紀半ば（Ⅱ期古）の土師器である。

45は土師器甕である。口径14.0cm、残存高さ4.95cmを測る。胎土は密で灰褐色で、器表は酸化で明橙色である。河内産であろう。

46は黒色土器A類椀である。口径23.2cm、残存高さ8.2cmである。胎土は密で灰褐色で、器表は酸化で明橙色である。内面にミガキ。内面と外面端部に炭素が付着する。47は黒色土器甕である。口径16.0cm、残存高さ5.3cmを測る。両面に粗いミガキと炭素が付着する。器形は45に類似する。

48～50は洛北産の緑釉陶器で、全釉の削り出し平底高台である。胎土は黄色がかった灰白色でやや軟質である。釉調は淡い黄緑色である。48は口径13.4cm、高さ2.4cmの皿で、端部を外反させ丸めておさめる。内面にミガキを施す。49は底径7.0cm、残存高さ4.1cmの椀である。内面にミガキを施す。50は底径8.6cm、残存高さ3.5cmの椀である。内面にミガキを施す。焼成はやや堅く、胎土もやや灰色である。

51は猿投産の口径13.5cm、残存高さ2.1cmの灰釉陶器蓋である。胎土はやや粗く灰白色である。外面全体に緑の透明な釉が掛かる。

52は須恵器皿である。口径14.0cm、高さ2.5cmを測る。削り出し平底高台で、胎土は灰色である。焼成は堅い。自然釉が重ね焼の際に口縁部内面に付着する。灰釉陶器か緑釉陶器の素地の可能性がある。

53～57は須恵器である。いずれも灰色で焼成は良好である。53は口径19.4cm、高さ6.9cmの須恵器椀である。高台を削り出し平底に糸切り痕が残る。54は口径18.8cm、残存高さ2.4cmの蓋である。口縁端部を外反させ、つまみ上げて作る。55は口径28.6cm、高さ10.5cmの平底鉢で、体部が喇叭状に開く。

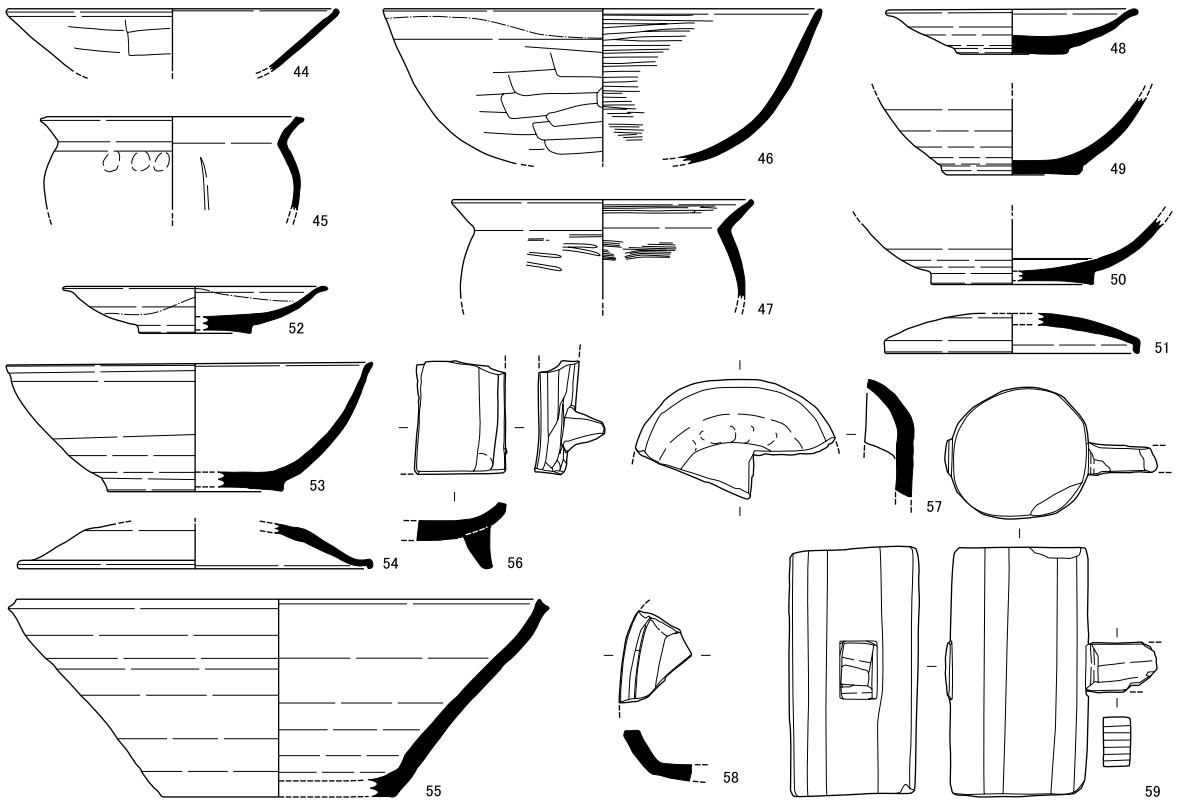
56は須恵質の風字硯である。端部は篋で平面に作る。5角に面取りした逆三角形の高さ約1.5cmの足を付ける。表面に墨の跡が残る。57は須恵質の風字硯海部である。端部を篋で平面に作る。先端部平面形は丸くおさめる。56の破片の可能性がある。

58は灰釉陶器の風字硯である。外面に薄い釉が掛かる。端部は篋で面取りを施す。胎土はややピンクがかった灰白色で堅い。

59は木槌である。材質は槌・柄ともにアカガシ亜属である。径は約7.0cm、長さ13.3cmに面取りした円筒形である。柄は根本で欠落しているが、縦2.6cm、横1.4cmの長方形の柄が頭部に貫通する。槌は作用面両端に露出した木目跡から杵目取りである。

その他の遺構（60～72） 60は溝613から出土した口径14.6cm、高さ2.1cmの土師器皿である。長石を含む。表面は明るい橙色で、端部のつまみ上げが大きい。10世紀初頭（Ⅱ期新）頃の土師器

井戸604



その他の遺構

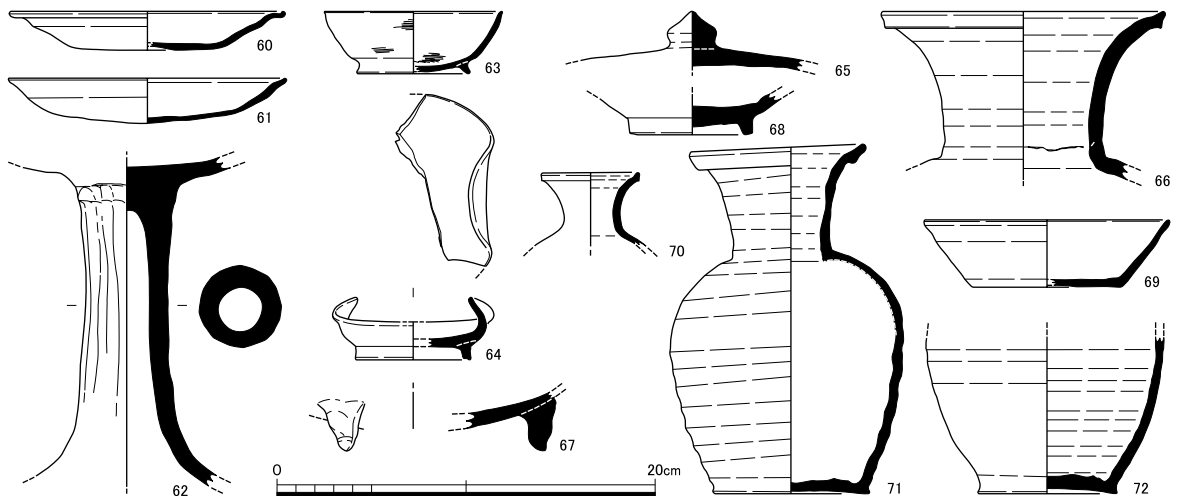


図26 井戸604・その他の遺構出土土器・木製品実測図（1：4）

に比定できる。61は溝504出土の口径14.7cm、高さ2.4cmの土師器皿である。60に比べ胎土がやや褐色化しており、端部のつまみ上げも小さい。10世紀半ば（Ⅲ期中）頃の土師器に比定できる。

62は溝504出土の土師器高杯脚部である。径は約5cm、残存高さ17.4cmである。芯棒に巻き付けて作り、面取りは施さない。

63は溝504出土の口径9.4cm、高さ3.3cmの黒色土器B類小碗である。両面に炭素が吸着する。比較的高い外反する貼り付けの高台を付けている。10世紀半ば（Ⅲ期中）頃に比定できる。

64は溝206から出土の高さ3.3cm、高台径6.1cmの緑釉陶器耳皿である。胎土は密で須恵質化して

いる。釉は全面に掛かる。暈付が2段の貼り付け輪高台で、10世紀代の美濃産であろう。

65は溝109出土の灰釉陶器蓋である。胎土は灰白色で、焼成はよい。径2.6cm、高さ2.0cmの宝珠つまみを付ける。上面外面に淡い緑の釉が掛かる。

66は溝206出土の灰釉陶器広口瓶である。口径15.0cm、残存高さ8.9cmを測る。10世紀代の美濃産と考えられる。

67は白色土器三足盤の足部である。胎土は軟らかく白色である。高さ2.0cmの脚部をやや内方向に作る。溝206から出土した。10世紀前半に比定できる。

68は中世初頭の輸入白磁碗である。溝102から出土した。胎土は密で灰白色。左ケズリで径6.5cmの輪高台を作る。釉はやや緑掛かった灰白色で、内面見込み重ね焼き部分を掻き落とす。外面腰に連続する縦方向のカンナ跡が残り、腰まで釉を掛ける。

69は須恵器杯である。1区断割から出土した。口径13.0cm、高さ3.6cmを測る。胎土は堅く灰色である。右回りの篋起こし痕が底部に付く。9世紀代の須恵器である。

70は須恵器瓶である。口径5.2cm、残存高さ3.9cmを測る。暗青灰色で長石を含む。柱穴606から出土した。

71は埋納遺構607に据えられていた口径9.4cm、高さ18.5cmの完形の須恵器瓶である。拳大のチャート石で蓋をしてあった。瓶の中身は土が入っただけで不明である。平底で糸切り痕が付く。胴部に右回りのロクロ目が付く。胎土は密であるが、焼成が甘く淡い灰白色である。10世紀前半代（Ⅲ期古）頃に比定できる。

72は埋納遺構608に据えられていた須恵器瓶底部である。胴部上は欠落している。残存高さ8.3cm、底径7.4cmを測る。埋納遺構607と同型の須恵器瓶と考えられる。底に平均径3.0cm砂岩を4個入れ、その上に3枚の延喜通寶が入れてあった。

（3）輸入陶磁器（図27、図版16、表5～7）

輸入陶磁器は小破片も含めると43点出土している。内容は越州窯青磁、邢窯あるいは定窯の白磁とその他に産地不明（長沙系か）の釉下に白化粧を施した製品がある。種別の比率は青磁72.1%、白磁18.6%、その他9.3%である（表5）。ここではそのうち21点を図示し、概説する。

青磁（73～88） 73・74は蛇の目高台の碗である。全面に施釉し、高台下端面を掻き取る。75～79は輪高台の碗である。これも全面に施釉し、高台下端面を掻き取っている。77の内外面にメアトが付くほかは内面にメアトはない。79は釉の発色が良好な優品である。80は形状から見て輪高台の碗の口縁部であろう。81は稜碗で、低い輪高台を持つ。75などと同様に高台下端面を掻き取るほか、全面に施釉している。内面にメアトはない。82～85は平底の碗である。底部外面にケズリ痕跡がなく、外周部を面取り状に削る。体部下方から底部外面には施釉しない。内外面にメアトが多数付く。86は底部外周を残し内側を削りくぼめた高台である。前面に施釉し、下端面を粗く掻き取る。高台下端面と外面にメアトが多数付く。87は水注の底部で、外面にのみ施釉する。内面には轆轤目が強く残る。88は香炉の体部片で、外面に3条の凸帯を巡らせる。

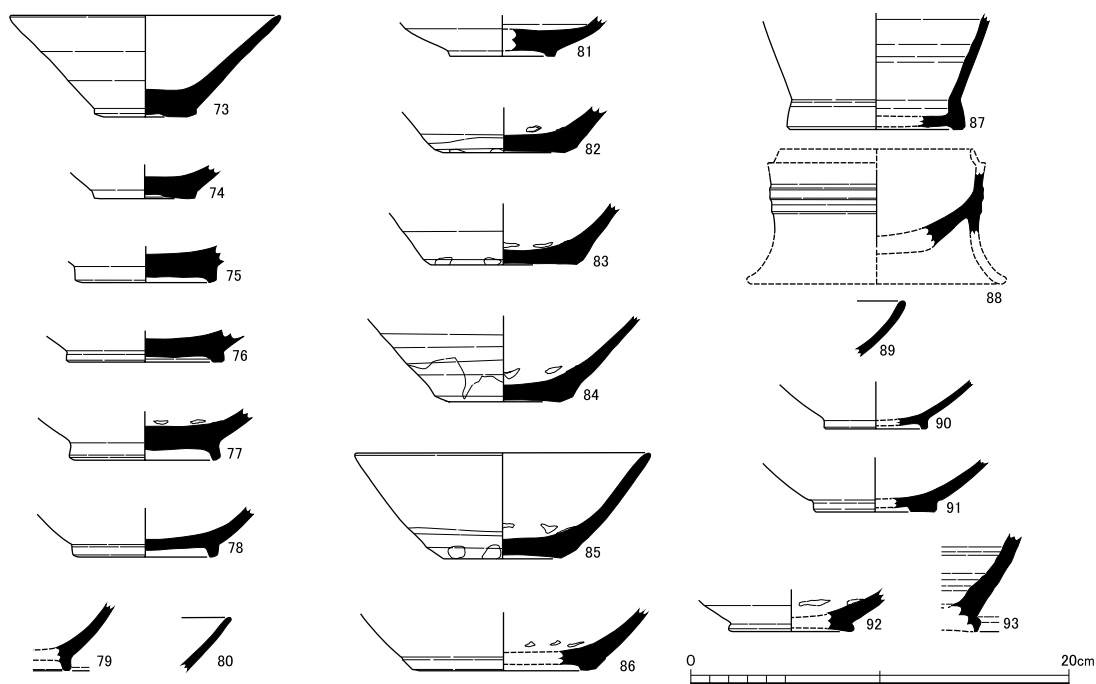


図27 輸入陶磁器実測図（1：4）

白磁（89～91） 89は内湾する口縁部の碗。釉は均質で厚く掛けられている。90は細い輪高台の碗。体部は大きく上方に広がる。形態や釉調からみて定窯の製品と思われる。91は蛇の目高台の碗である。小さな玉縁状の口縁が付くタイプである。

その他（92・93） 胎土が褐色味を帯び、半磁器質で白土を化粧掛けした粗製品が少量出土している。92は中央部が上方に反る平高台の碗で、内面のみ白化粧する。釉は底部外面を除き施されている。内面にはメアトが付く。93は壺底部で、外面の体下部より上に白化粧し施釉している。内面は無釉だが、化粧土の点滴が認められる。釉下の化粧掛けが確認できる破片が他に2点ある。

これらの陶磁器には品質面で幅があり、ここで仮に出土した全点を対象に、成形や調整が丁寧で、全面に施釉されメアトを付けず釉の発色も良好なものをA、それに準じるが調整がやや雑で、釉調が不良なものをB、底部外面に施釉せず、内面にメアトを残すものをC、それ以外の粗製品をDに分類し比率を求めると、A 16.3%、B 48.8%、C 27.9%、D 7.0%とな

表5 輸入陶磁器器種比率表

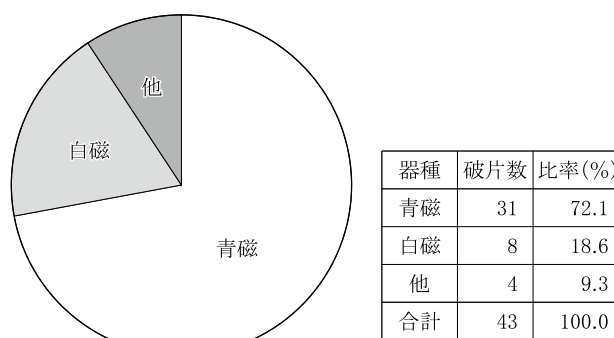


表6 輸入陶磁器品質比率表

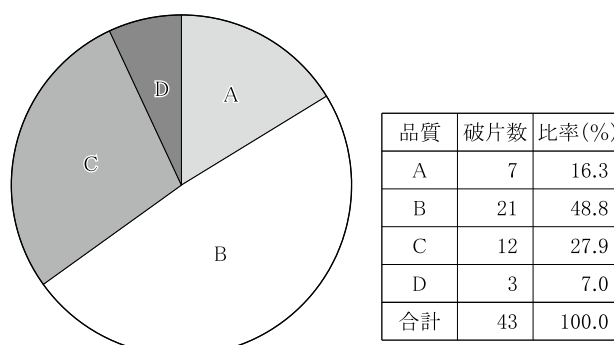


表7 輸入陶磁器一覧表

No.	種類	器形	底部形態	施釉部位	メアト	口径	器高	底径	出土遺構	品質
73	青磁	椀	蛇の目高台	全面下端部カキトリ	底外	14.4	5.4	5.4	溝201	B
74	青磁	椀	蛇の目高台	全面下端部カキトリ	不明	－	－	5.4	溝613	B
75	青磁	椀	輪高台	全面下端部カキトリ	底外	－	－	7.5	溝108	C
76	青磁	椀	輪高台	全面下端部カキトリ	底外	－	－	8.4	溝107	B
77	青磁	椀	輪高台	全面下端部カキトリ	底内外	－	－	8	溝111上層	B
78	青磁	椀	輪高台	全面下端部カキトリ	底外	－	－	7.8	溝110	B
79	青磁	椀	輪高台	全面下端部カキトリ	不明	－	－	－	溝603	A
80	青磁	椀	口縁部	全面	－	－	－	－	溝411	A
81	青磁	稜椀	輪高台	全面 下端部カキトリ	底外	－	－	5.6	溝402	B
82	青磁	椀	無高台	底外無釉	底内外	－	－	7.6	溝102	C
83	青磁	椀	無高台	底外無釉	底内外	－	－	7.8	溝109	C
84	青磁	椀	無高台	底外無釉	底内外	－	－	7.4	溝111上層	C
85	青磁	椀	無高台	底外無釉	底内外	15.6	5.5	6.4	溝111上層	C
86	青磁	椀	輪縁高台	下端部カキトリ	底内外	－	－	9.8	溝111上層	B
87	青磁	水注	輪縁高台	外面	底外	－	－	9.4	溝111上層	B
88	青磁	香炉	不明	全面	－	－	－	－	溝111上層	B
89	白磁	椀	口縁部	全面	－	－	－	－	溝411	A
90	白磁	椀	輪高台	全面 下端部ケズリ	無し	－	－	5.4	溝206	A
91	白磁	椀	蛇の目高台	全面 下端部カキトリ	無し	－	－	6.5	溝613	B
92	陶器	椀	平高台	底外無釉 内面白化粧	底内外	－	－	6.6	溝111上層	D
93	陶器	壺	底部	白化粧 底外無釉	底外	－	－	－	溝111上層	D

る。半数近くがBである点と、粗製品のDより良品のAが多い点が確認できるが、今回の調査地に西接する右京二条三坊十五町の宅地内の調査（図1、No.1 調査区）で出土した170点の輸入陶磁器についてもほぼ同様の結果が得られており、これがこの周辺における陶磁器の受用傾向とみてよいだろう（表6）。

（4）瓦類（図28）

軒丸瓦（94・95） いずれも外区に連珠文を配し接合式複弁蓮華文軒丸瓦であるが、中房部が欠落している。胎土・表面の色調が白色で二次焼成を受けている。94は溝111、95は溝411から出土した。94は平安時代前期。95は近衛府を意味する「近」銘が打たれた平安時代前期の軒丸瓦に類似する。

軒平瓦（96～98） 96は平安京内に搬入された重郭文難波宮式軒平瓦である。直線顎で平瓦部凹面縦ケズリを施し、端部に幅5cmの横ケズリして調整する。凸面も縦ケズリを施している可能性がある。胎土は甘く灰白色で表面は黒い。溝110から出土した。

97は長岡京式の唐草文である。曲線顎で平瓦部凹面に粗い布目痕がある。凹面端部に幅5cmの横ケズリを施す。焼成は堅く灰白色である。溝111上層から出土した。

98は中心飾りが対向Cの唐草文である。栗栖野瓦窯産で曲線顎。長石を多く含み、胎土が粗く灰白色である。器表は炭素が吸着している。9世紀の末の可能性が高い。溝603から出土した。

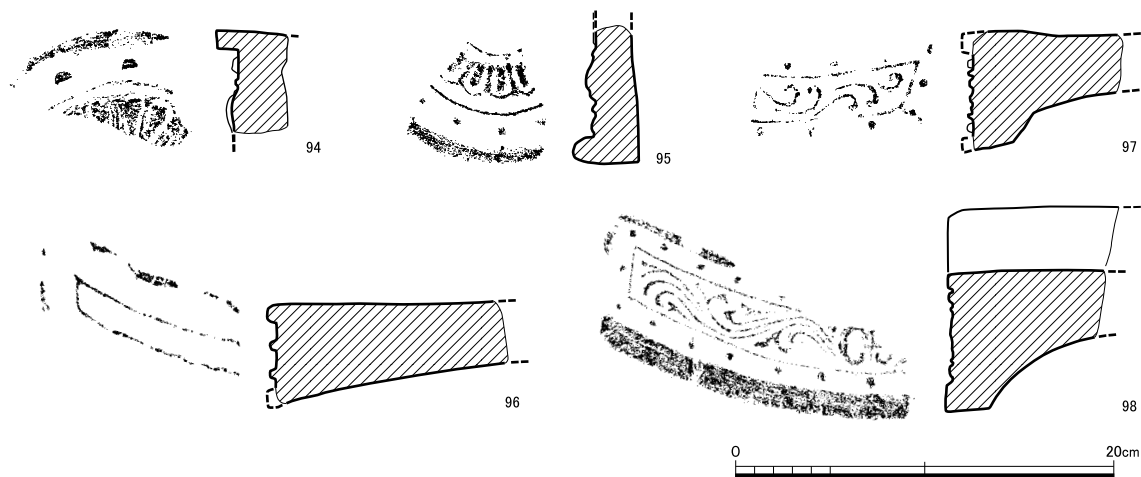


図28 軒瓦拓影実測図（1：4）

（5）銭貨（図29、図版15）

門跡内側に埋納された埋納遺構608出土の須恵器瓶から延喜通寶（初鑄907年）が3枚（99～101）出土している。直径約2cmで腐蝕が進行している。99は1.881g、100は1.844g、101は1.036gである。101は割れており、破損の恐れから拓影から除外した。

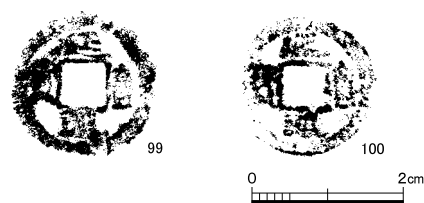


図29 銭貨拓影（1：1）

（6）石製品（図30・31、図版15）

102～105（図版15）は埋納遺構608出土の須恵器瓶底に入れられていた丸く不定型な約3.0cm程度の砂岩玉である。色は光沢のない淡い褐灰白色である。

106は石帯末製品である。溝110から出土した。板状で長さ4.35cm、幅1.65cm、厚さ0.85cmを測る。材質は玉髓で、やや緑がかった透明感がある乳白色である。三面が滑らかに磨かれており、裏面には石切鋸による縦縞の痕跡が残る。片方が割れているため幅は不明である。先端片方面も途中まで鋸を入れるが、その先は割れている。磨いた面に原石の表面が一部に残存することから歩留まり品の可能性もある。

107は土坑629から出土した灰色砂岩製の用途不明の器である。平面形楕円で長さ5.5cm、幅4.95cm、高さ2.3cmを測る。内面に器具による抉った痕跡が残る。端部は丸くおさめている。トリベなどの鑄造関連遺物の可能

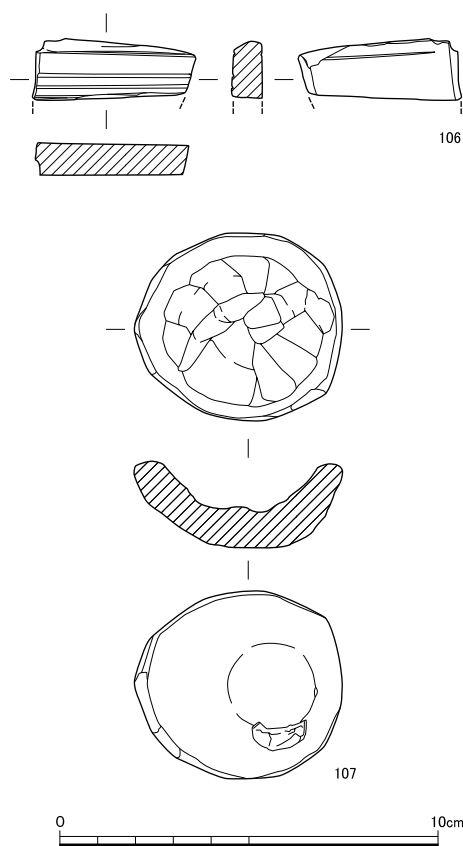


図30 石製品実測図（1：2）

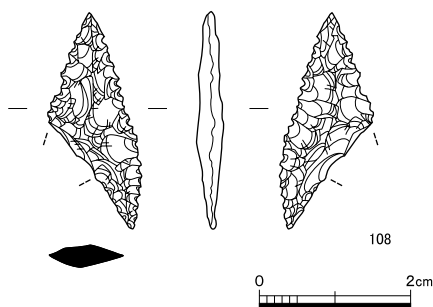


図31 石鏃実測図（1：1）

性があるが、付着物はない。

108は溝111上層から出土した赤褐色のチャート製石鏃である。長さ2.85cm、幅1.25cm、厚さ0.35cmを測る。片方の脚部が欠落している。全面に刃に向かって押圧剥離を施し薄く成形している。特に刃先は、片面に細かい鋸状に連続する鋭いギザギザを約0.1cm刃先に向けて剥離させ、さらに尖らす。チャート製であることから縄文時代に遡る遺物であろう。

5. まとめ

今回の調査では、前年度調査報告書で10世紀後半に埋まったとした恵止利小路西側溝の南延長部を良好に検出した。1区の溝111最下層から10世紀初頭（Ⅱ期新古相）の土師器群が出土した。溝111ではその上に10世紀代の砂礫層が覆っていたので、側溝は10世紀初頭には掘削されていたもの¹⁾と考える。また、前年度調査の中御門大路交差点の手前で止まっていた中世以前の恵止利小路西側溝が、今回調査の春日小路交差点と大炊御門大路交差点でも手前で止まっていた。特に今回の4区では春日小路南端で恵止利小路西側溝411北端が立ち上がっていた。このことから、中御門大路・春日小路・大炊御門大路との交差点においては、恵止利小路西側溝が道路面を縦断しない可能性が高くなった²⁾。

次に土地利用の変遷であるが、今回の出土遺物はほとんどが9世紀から10世紀までの遺物で占められ、11世紀代以降の遺物はわずかである。このことは近辺が9世紀から10世紀代まで宅地として利用されていたことを示す。今回の検出した溝111最下層には10世紀初頭の完形の土師器群（Ⅱ期新古相）を含む均一な暗褐色ないし黒褐色泥土が厚く堆積していた。これは流水のない滞留堆積を示しており、交差点で恵止利小路西側溝の縦断がないことから、側溝は交差点地点で止まるか、もしくは東西路の側溝へL字状に折れ曲がることと関連があると考えられる。また、この滞留堆積上に砂礫層を検出したことや、溝411の堆積層に3層の砂礫層が挟まれていることは、近辺が洪水に見舞われ易いことを示している。ただし、この段階では砂礫層は側溝内に留まっており、出土遺物からも10世紀を通じて宅地として存在していたことを示すが、右京衰退の原因が湿地だけでなく扇状地における洪水も契機になる可能性を示唆している。また、この砂礫層の上に遺構検出面の溝上面まで溜まった滞留層が存在したことは、ほぼ宅地であった10世紀末まで側溝の位置があまり変化していないことを示している。

しかし、調査区東部で検出した中世以降の溝までの中央溝群は浅く、褐色系の粘土ブロックなどを含む。これらの溝から少量であるが11世紀の遺物が出土しており、前年度調査と同じく耕作地としての巷所化が11世頃に開始されたことを示している。また、中央溝群に対して調査区東端で検出した中世以降の溝は主に灰色系の砂泥層と砂礫層が堆積しており、洪水によって埋まった可

能性が高い。中世にはほぼ現代の西小路側溝付近まで巷所化が進展していたことを示している。

調査地近辺に流れる宇多川や西堀川・御室川の氾濫は造営当初より脅威であったはずであり、特に平安時代中期以降の右京の衰退や荘園化・耕作地化に平行して、平安京右京の北郊外に10世紀末に造営された宇多天皇の仁和寺や、10世紀末から11世紀にかけて造営された諸代天皇の御願寺である四円寺（円融寺・円教寺・円乗寺・円宗寺）による開発は、当地周辺での水害の危険性を高めたであろう。前年度調査で検出した中御門大路交差点と、今回の調査で検出した大炊御門大路交差点直上にも中世の洪水層からなる砂礫層が堆積していた。また、地山面より標高が低い春日小路路面直上にも、時期不明ではあるが灰黄褐色粗砂が一部薄く堆積していた。このことから中世には交差点の大部分が降水時には浸水（巷化）する状況が想定できる。

十五町の東一行北六門東端で築地中心推定地から10世紀半ば（Ⅲ期古）の門・橋脚・埋納遺構をセットで検出したことや、門より古い9世紀半ば（Ⅱ期古）の井戸604が宅地側に沿って掘られていたこと、恵止利小路西垣に該当する柱列と宅地からの排水施設などを検出したことなどは、今後の平安京右京の宅地の在り方を解明する一助となるであろう。また、調査区全体から9～10世紀の輸入陶磁器が多く出土したことや、門を意識した埋納施設を設けていたことも、当時の社会構成や習俗を考える上で興味深い。

なお、自然科学分析で、平安時代前半の溝から紅花の花粉が検出されたが、中世の溝からも検出している。この問題に関しては、今後の課題としたい。

註

- 1) 『掌中曆』（『続群書類従』第32輯上）に「延暦十三年十一月二一日造京式、京中大小小路並築垣掘溝条坊、使従四位下民部大輔兼東宮学士右衛門督伊予守菅原朝臣真通」とあり、平安京遷都時に「京中大小小路並築垣掘溝条坊」とする計画が存在したことは明確であろう。
- 2) したがって、前年度調査報告で中御門大路交差点北端で検出した3区北壁から南西に向かって舌状に伸びる「土坑302」も、その北の2区で検出していた「溝202」か「溝203」の南延長南端と捉えるべきであり、「土坑302」の南端から「路面306」を検出していることから、中御門大路との交差点北端で側溝が立ち上がっていたと訂正したい。
- 3) 山中章「都城の交通」（『日本古代都城の研究』柏書房、1997年）は、都城の交差点における側溝のあり方を、交通優先順位から南北側溝が横断しない東西路優先の「条型」、東西側溝が横断しない南北路優先の「坊型」、さらに東西南北側溝が交差する「閉鎖型」、いずれも交差しない「開放型」の4型式に分類している。

6. 付論 自然化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の平安京右京二条三坊十六町の既往の発掘調査では、平安時代以降の溝跡・杭跡・井戸跡などの遺構が検出されている。ただし、後世の耕作地造成などの地表掘削などが激しく、当時の遺構周辺の土地利用状況とその変遷を把握するための情報量が少ない。そのため今回の自然科学分析調査では、平安時代前半の調査区周辺の環境、特に土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、溝・井戸などの遺構埋積物を対象に花粉分析を実施する。

(1) 調査地点・分析層準

分析調査は、1区の溝102（中世）、溝111（平安時代前半）、4区の溝411（平安時代前半）、6区の溝603（平安時代前半）、井戸604（平安時代前半）、土坑614（平安時代前半）の各遺構を充填する堆積物について実施する。以下に各遺構の堆積層の累重状況について発掘調査時の層名に基づいて記載する。なお、4区の溝411、6区の井戸604、土坑614については現地での層相観察を行っていないので採取されている試料の層相について記載する。なお、調査区で検出された遺構の基盤をなす堆積物は、砂礫から砂質泥からなり、側方への層相変化が著しい扇状地性堆積物からなる。

1) 1区 溝102（中世）

溝102の充填堆積物は、上位より16層・17層の2層に区分されている（図32）。16層は、暗褐色を呈する中粒砂・細礫・中礫混じり泥質細粒砂とその偽礫からなる。遺物片も混じる。偽礫は亜角でブロック状を呈するものが多く、その長軸方向の配向は不規則である。また、上方に向けて細粒化しており、偽礫の形状が不明瞭となり、数mm幅程度の植物根痕が分布する。これらの層相から、16層は人為的営力により形成された埋め戻しの堆積物と判断される。最上部は土壤生成作用の影響を受けているが、後世の削平により土壤層位のA層はなくなっている。

17層は暗灰黄色を呈する細粒砂～極粗粒砂、細礫～大礫からなる砂礫と、その上位に累重する溝側壁の基盤堆積物に由来する礫混じり細粒砂質泥からなる。上方細粒化する。砂礫はトラフ型斜交葉理をなす。砂礫上位の細粒砂質泥はやや腐植を含む。生物擾乱により堆積構造は不明瞭となっている。これらの層相から、17層は溝内に流入した洪水堆積物と、洪水後の比較的静穏な堆積環境下で周囲から流入あるいは斜面堆積物の崩落により形成された機能期の堆積物と判断される。

以上の溝充填堆積物のうち、17層上部（試料2）の擾乱層準について花粉分析を実施する。

2) 1区 溝111（平安時代前半）

溝111充填堆積物は、上位より20～24層に区分されている。このうち、20・21層が東側に再構築された溝を充填する堆積物、22～24層が初期段階の溝を充填する堆積物に相当する。

20層は細礫・中礫、砂質泥の偽礫が混じる砂質泥からなる。礫は凹地斜面に平行するように堆積

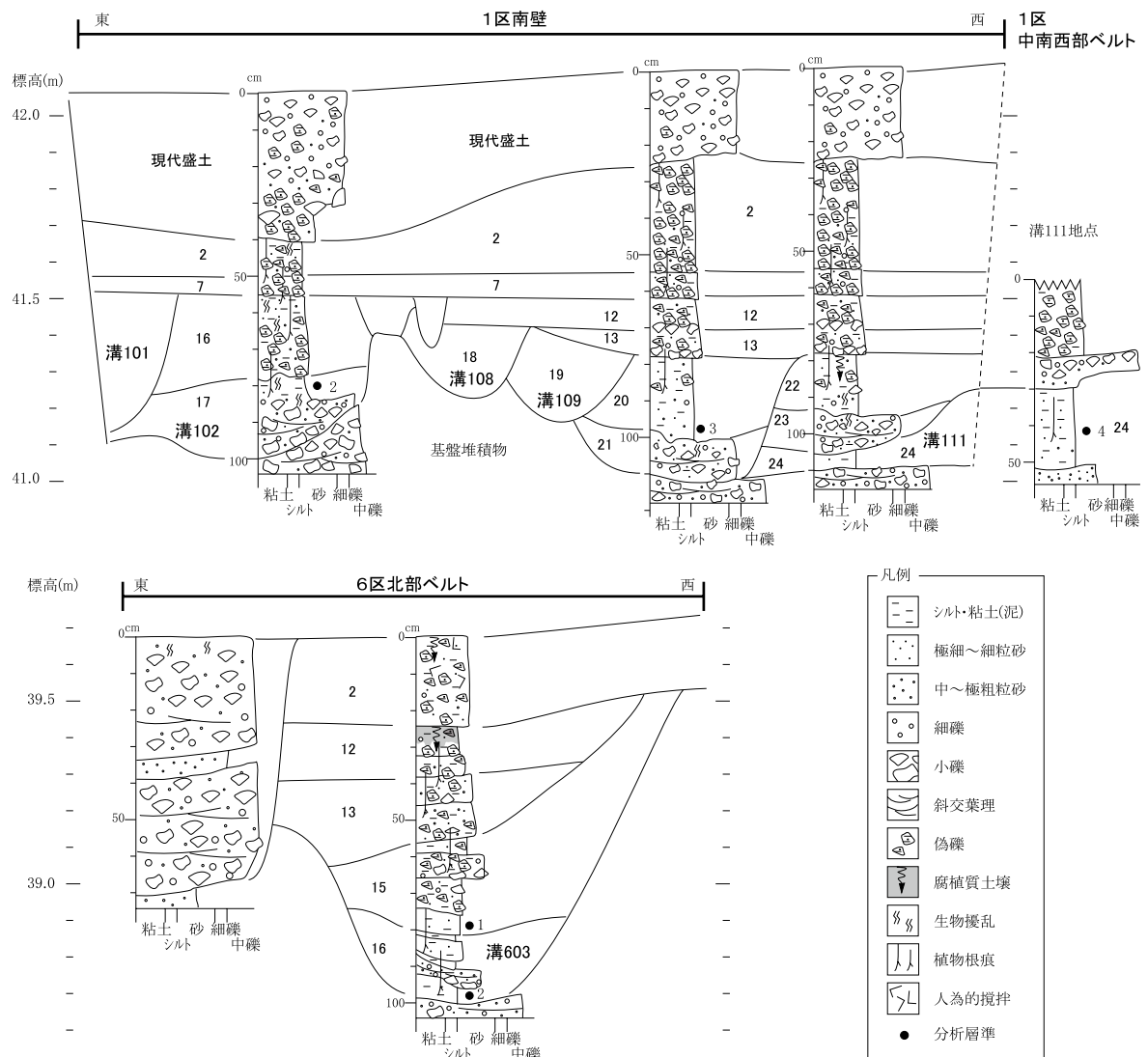


図32 調査地点の層序

している。21層は泥混じり砂礫からなる。礫は、亜角の中礫を主とする。不明瞭な葉理構造が確認される。22層は泥質細粒～中粒砂からなり、上部は生物擾乱が顕著である。23層は細礫～大礫、中粒～極粗粒砂からなる砂礫層。不明瞭ながら葉理構造が確認される。24層は暗灰～黒灰色を呈するやや腐植を含む砂質泥からなる。生物擾乱により初生の堆積構造が不明瞭となっている。

以上の層相から、24層は溝111機能期の堆積物で、溝周辺より雨水の流入や斜面側からの崩落など比較的静穏な堆積環境で形成されたことが推定される。23・22層は24層を侵食する、洪水時に溝内に流入した洪水堆積物と判断され、上方細粒化している。22層堆積後に東側に溝が再構築される。それにより、溝肩部では土壤生成作用が進行するようになる。新しく構築された溝は、洪水時に流入した砂礫、その後の機能期に堆積した砂質泥により埋没したと推定される。

以上の溝充填堆積物のうち、機能期の堆積物である21層（試料3）、24層（試料4）について花粉分析を実施する。

3) 4区 溝411（平安時代前半）

分析試料は溝411充填堆積物下部より採取されている。堆積物試料の層相は黒灰色を呈する砂混

じり腐植質泥からなる。

4) 6区 溝603 (平安時代前半)

15層は極細粒砂質泥、砂礫、極細粒砂質泥からなる。炭片が混じる。16層は葉理構造の発達する砂礫を挟在する極細粒砂質泥～泥からなる。以上の層相から、16層および15層再下部が溝機能期の堆積物と判断される。砂質泥～泥質砂は周辺より雨水などの流入時に供給された堆積物で、砂礫は氾濫時に供給された堆積物と推定される。15層中部より上位層準の堆積物は人為的営力により形成された堆積物と推定される。

以上の溝充填堆積物のうち、機能期の堆積物上部の15層下部（試料3）と16層（試料2）について花粉分析を実施する。

5) 6区 井戸604

分析試料は充填堆積物下部より採取されている。層相は、暗灰色を呈する極細粒砂質泥からなり、細礫・中礫が混じる。

6) 6区 土坑614

分析試料は充填堆積物下部より採取されている。層相は、暗灰～黒色を呈する極細粒砂質泥からなる。細礫・中礫が混じる。また、周辺での人間活動を示唆する数mmの微小ブロック（フラグメント）も混じる。

(2) 分析方法

試料約10 gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989) などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) などの邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態などの情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 結果

花粉分析結果を表8、図33に示す。8試料ともに分析残渣は残っており、20～150 μ l程度である。

分析残渣が最も多いのは6区の井戸604埋土である。花粉化石の保存状態は悪いが、6区の井戸

表8 花粉分析結果一覧表

種 類	上段:調査区 中段:遺構名 下段:試料名							
	1区南壁		1区中南部ベルト	4区	6区			
	溝102	溝111	溝111	溝411	溝603		井戸604	土坑614
	2	3	4	埋土	1	2	埋土	埋土
木本花粉								
モミ属	-	-	-	-	-	2	28	9
ツガ属	-	1	1	-	-	-	43	23
トウヒ属	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属	1	1	1	1	-	2	26	2
コウヤマキ属	-	-	1	1	-	1	1	1
スギ属	-	-	-	-	-	1	1	-
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1
ブナ属	-	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	2	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	1	-
シイ属	-	-	-	-	-	-	1	-
ニレ属—ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	1	-
草本花粉								
イネ科	-	-	-	-	-	-	11	-
サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	1	2	1
スベリヒユ属	-	-	-	-	-	-	1	1
ナデシコ科	-	-	-	1	-	1	5	-
アブラナ科	1	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	-	-	-	-	-	-	-	10
オミナエシ属	-	-	-	-	-	-	-	1
ユウガオ属	-	-	-	-	-	-	-	1
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	1	-
ペニバナ属	1	-	1	-	1	3	-	1
不明花粉								
不明花粉	-	-	-	-	-	-	1	-
シダ類孢子								
他のシダ類孢子	30	23	8	13	32	21	35	31
合 計								
木本花粉	1	3	3	3	0	6	104	36
草本花粉	2	0	1	1	1	5	20	15
不明花粉	0	0	0	0	0	0	1	0
シダ類孢子	30	23	8	13	32	21	35	31
合計(不明を除く)	33	26	12	17	33	32	159	82
残渣量(μ l)	20	20	50	50	30	50	150	50
花粉の保存状態	悪い	悪い	悪い	悪い	悪い	悪い	やや悪い	悪い

604埋土はその中でも比較的良好。花粉化石の検出数は全体的に少なく、定法の3倍の面積を検鏡しても、6区の井戸604埋土で木本花粉がca.100個体を超える程度である。残渣のほとんどは、黒～黒褐色の植物片である。一見微粒炭に見えるが、光を通すことや割口がシャープでないことなど、山野井（1996）などでみられる典型的微粒炭とは異なる。したがって、火熱によって生じた微粒炭ではなく、腐植酸などによる着色や炭化度が低い植物遺体に由来する可能性がある。また、植物片には希に放射組織の一部や壁孔、導管組織の一部などがみられ、樹木由来ものが一部混じっていると考えられる。

6区の井戸604埋土は、木本花粉が全体の2/3を占める。ほとんどが針葉樹で、モミ属、ツガ属、マツ属の3種が大部分を占める。草本類では、イネ科やナデシコ科などを含む。花粉化石の種類数が少なく、単調な組成である。

他の7試料も針葉樹花粉を中心に検出されるが、個数は僅かである。その中でも6区の土坑614

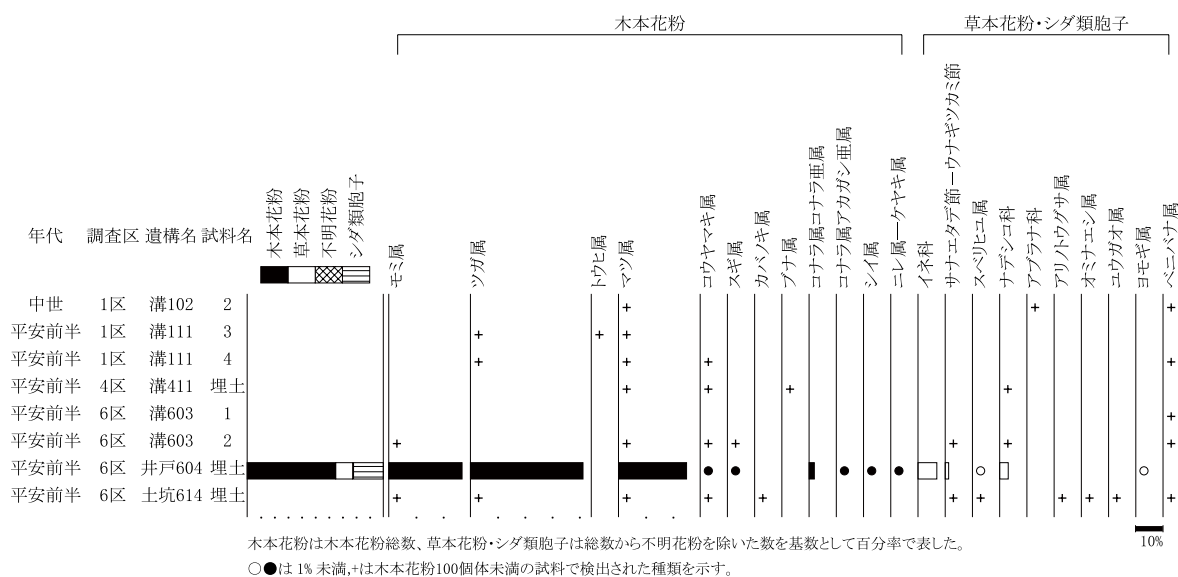


図33 各遺構埋土の花粉化石群集

埋土は花粉粒数がやや多く、傾向は6区井戸604埋土と似ている。

栽培のために渡来した種類は、ユウガオ属とベニバナ属である。イネ科の中にもイネ属と思われる花粉化石が含まれるが、保存状態が悪いので図表中で区分していない。

(4) 考察

分析結果をみると、いずれの試料も保存状態が悪い。比較的保存状態の良かったいずれの試料も針葉樹花粉中心の単調な組成である。針葉樹花粉やシダ類孢子は、広葉樹・草本花粉に比べてスポロポレニンの量が多いため風化に強く残りやすい(中村,1967;徳永・山内,1971など)。今回、花粉化石の保存が全体的に悪いことを考えると、これらの増加は、周辺植生を反映しているものではなく、風化に強い種類が相対的に増加した可能性がある。

このような組成は本遺跡の南方に位置する平安京右京三条三坊三町跡および平安京右京三条三坊四町跡の平安時代前半の花粉化石群集に似る(パリノ・サーヴェイ,2009・2012)。この報告によれば、保存が悪いことによる相対的な針葉樹花粉増加の影響はあるとしながらも、モミやツガなどの針葉樹が、山地や山地に続く扇状地面に分布していたと推測している。しかし、既存の平安京関連の花粉分析結果(平安京右京三条一坊三・六・七町跡;環境考古学研究会,2002、平安京右京三条一坊二町跡;環境考古学研究会,2004、平安京右京五条二坊九町・十六町;パリノ・サーヴェイ,1991、平安京右京六条一坊三町跡;パリノ・サーヴェイ,2008など)をみると、木本花粉ではアカガシ亜属が多産する点で共通し、スギ属やヒノキ類、コナラ亜属などを伴う事例が多い。過去の分析結果から考えると、傾向として扇状地上や山地に近いほど針葉樹花粉が多く、モミ、ツガ、スギ、ヒノキ類などは、扇状地上や土地条件の悪い谷筋などに生育していた可能性がある。一方、低湿地ほど落葉広葉樹花粉や常緑広葉樹花粉が多い傾向が確認されることから、これらは河畔や低地を中心に生育していた可能性がある。今後は、既存の花粉分析結果を立地条件と照らし合わせながら細かく検討していく必要がある。

マツ属は成長が早く痩地に育つ陽樹であることから、二次林を構成することが多い。このため人為的な森林破壊によって増加することが知られており、これまでの平安京の調査においてもマツ属花粉の増加が確認されている。一方、マツは有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安京の庭園でも植栽されていたことが、文献などの調査により明らかにされている(飛田,2002)。今回検出されたマツ属も、こうした二次林や植栽に由来すると考えられる。また、マツ属の多産傾向は、右京域北部で顕著である。

草本花粉は木本花粉に比べて低率で、イネ科などが検出される。当時の土地利用が宅地であったとされることから、土地開発により開けた場所に生育していたものとみられる。ただし、草本花粉の産出割合が低く、草本植生の発達が貧弱であった可能性がある。同様の傾向は宅地として利用されていた平安京右京三条三坊三町跡などでも確認されており、宅地領域での特徴の可能性がある。

平安時代前半の遺構埋土から検出された栽培植物は、イネ属、ベニバナ属、ソバ属(ベニバナ属は中世の遺構埋土でも検出)であり、周辺での栽培に由来すると思われる。このうちベニバナ属に含まれるベニバナは、現在では染料、油脂、鑑賞用として利用されている。これらの花粉化石は、これまでの平安京域の遺跡でもしばしば検出されており、広く栽培・利用されていた可能性がある。

引用文献

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I).Almqvist&Wiksell,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II),147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 平安京跡右京三条一坊三・六・七町,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,33-47.

環境考古学研究会,2004,溝64の土壌分析について.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,21-23.

中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

飛田範夫,2002,日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

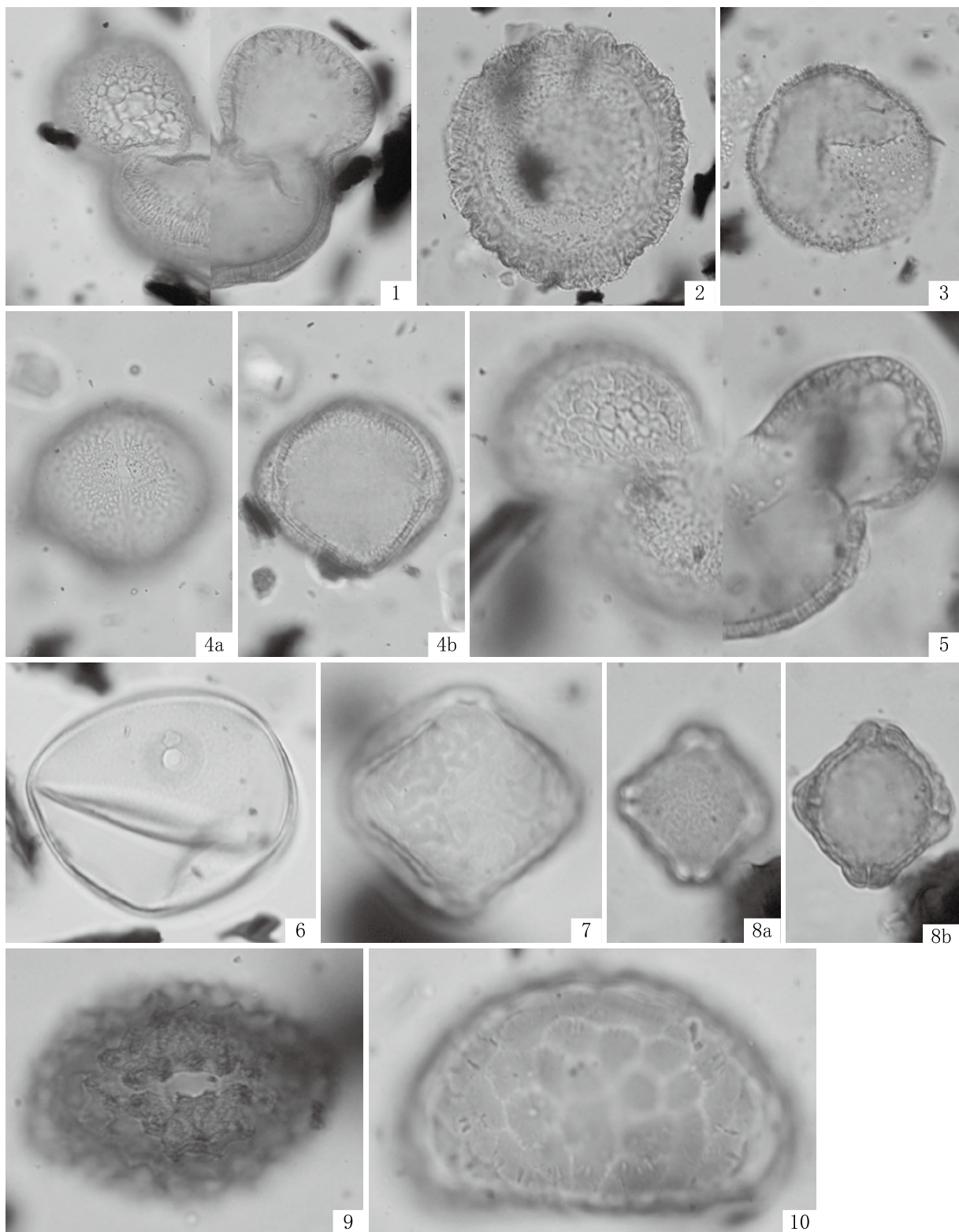
山野井 徹,1996,黒土の成因に関する地質学的検討.地質学雑誌,102,526-544.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告,平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町,京都文化博物館,108-116.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2008,付章 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-7 平安京右京六条一坊三町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,39-62.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2009,付論1 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-4 平安京右京三条三坊三町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,44-62.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2012, 6. 付章 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-4 平安京右京三条三坊四町跡,財団法人京都市埋蔵文化財研究所,46-51.



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1. モミ属(6区 井戸604 埋土) | 2. ツガ属(6区 井戸604 埋土) |
| 3. スベリヒコ属(6区 井戸604 埋土) | 4. ユウガオ属(6区 土坑614 埋土) |
| 5. マツ属(6区 井戸604 埋土) | 6. イネ科(6区 井戸604 埋土) |
| 7. ニレ属—ケヤキ属(6区 井戸604 埋土) | 8. アリノトウグサ属(6区 土坑614 埋土) |
| 9. ベニバナ属(6区 土坑614 埋土) | 10. シダ類胞子(6区 土坑614 埋土) |

図34 花粉化石

図 版



1 1区北トレンチ全景（北から）



2 1区南トレンチ全景（北から）



1 1区南トレンチ南壁断面（北から）



2 1区溝111内土師器群（北から）



1 2区北半全景（北から）



2 2区南半全景（北から）



1 3区全景（北から）



2 3区断割断面（南西から）



1 4区全景（北から）



2 4区北壁断面（南から）



1 4区落込み406（東から）



2 4区溝408内土器群（北西から）



3 4区溝411内土師器群（北東から）



1 5区全景（北から）



2 5区北壁断面（南東から）



1 6区北トレンチ全景（北から）



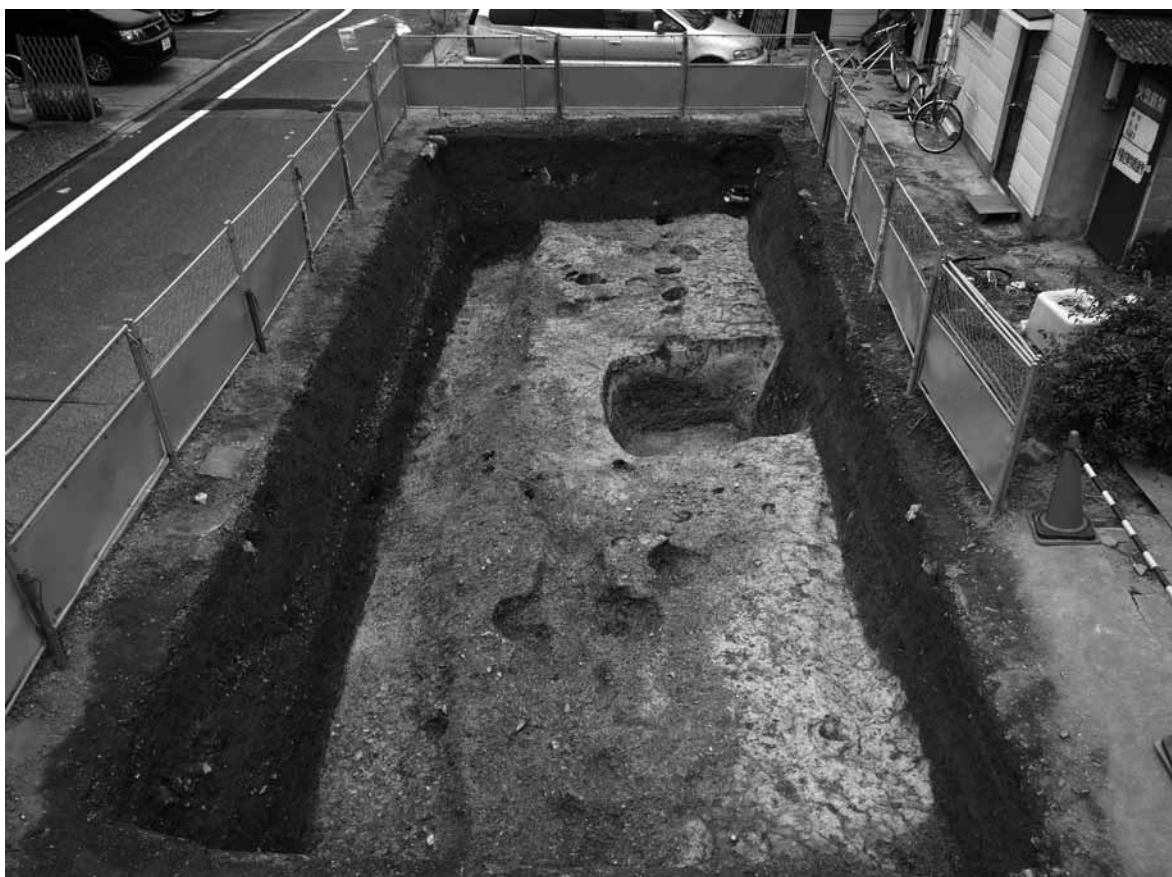
2 6区北トレンチ北壁断面（南から）



1 6区南トレンチ北半全景（北から）



2 6区南トレンチ北半南壁断面（北から）



1 6区南トレンチ南半全景（北から）



2 6区南トレンチ南半南壁断面（北から）



1 6区溝602・603（北東から）



2 6区井戸604（北東から）



1 6区門1・橋脚1（北東から）



2 6区埋納遺構607（北東から）



3 6区埋納遺構608（西から）

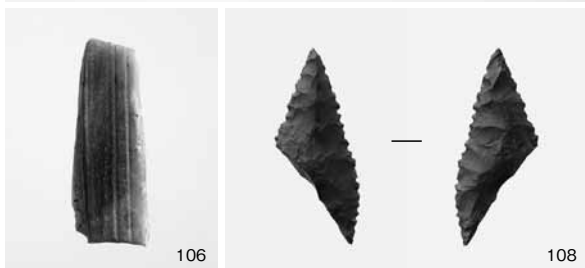
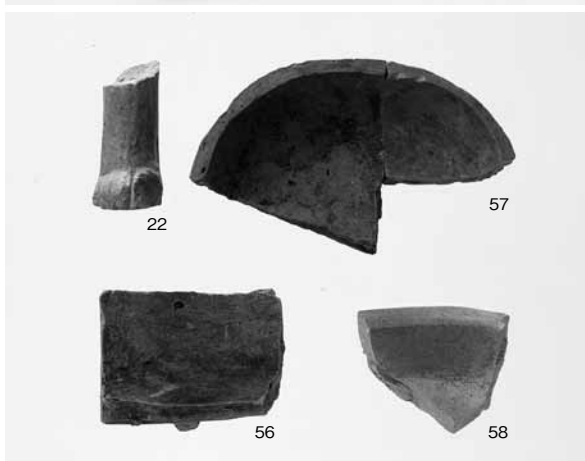


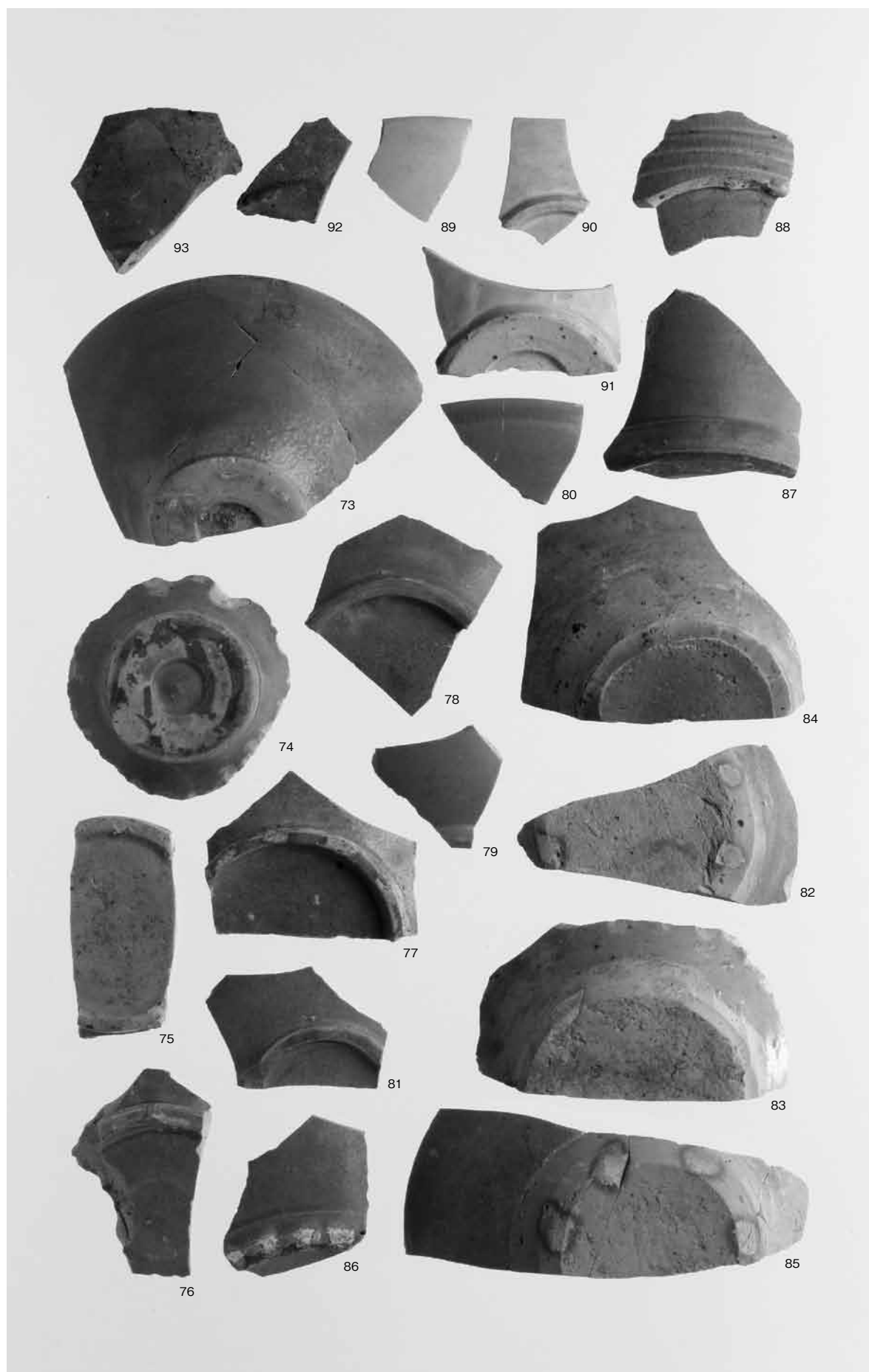
1 7区全景（南から）



2 7区西壁断割断面（東から）







輸入陶磁器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょううきょうにじょうさんぼうじゅうご・じゅうろくちょうあと							
書 名	平安京右京二条三坊十五・十六町跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-14							
編 著 者 名	東 洋一							
編 集 機 関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年3月15日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとうしきょうく 京都市右京区 はなぞのやつくちちょう 花園ハッ口町、 はなぞのかすがちょう 花園春日町 ちない 地内	26100	1	35度 01分 02秒	135度 43分 32秒	2012年9月 10日～2012 年11月29日	579.6㎡	道路拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京跡	都城跡	縄文時代			石製品		9世紀代の井戸と柱列を検出した。 10世紀代の門、橋脚、埋納遺構をセットで検出した。 10世紀から中世までの恵止利小路西側溝を検出した。	
		平安時代前半 (9～10世紀)			溝、路面、落込み、門、橋脚、埋納遺構、井戸、柱列、土坑	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品、土製品、金属製品、銭貨		
		平安時代後半 (11～12世紀)	溝	土師器、須恵器、黒色土器				
		中世	溝	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-14

平安京右京二条三坊十五・十六町跡

発行日 2013年3月15日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961